

# 甲府城下町遺跡 32

(山梨県甲府市武田1丁目44-1地点)

—集合住宅建設事業に伴う発掘調査報告書—

2023

株式会社マリモ  
甲府市教育委員会  
昭和測量株式会社



## 序

県都甲府の発展は、16世紀代の武田信虎による府中移転・躰躰が崎館建設、続く信玄、勝頼の武田氏による中世の武田城下町の整備によりはじまります。天正10年の武田家滅亡後、16世紀末には、一条小山に築かれた甲府城を中心に、東西約1.4km、南北約2kmの範囲に、三重の堀と土塁に囲まれた甲府城下町が、豊臣家の五奉行の一人である浅野長政と幸長親子により築られました。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いにより浅野家は紀州和歌山へ転封となり、以後江戸時代17世紀代は、徳川家一門、18世紀前半は柳沢吉保・吉里、以降幕末まで甲府勤番などが治めました。江戸後期には、歌舞伎役者の市川団十郎が来甲し歌舞伎を上演し、歌川広重など浮世絵師が訪づれ、江戸の文化が流入し栄えていました。

本報告書は、集合住宅建設事業に伴い実施された、甲府市武田1丁目44-1地点の発掘調査結果です。今回調査が行われた武田1丁目44-1地点周辺は、躰躰が崎館を中心に相川扇状地上に広がる中世の武田城下町と、扇状地の扇端部から一条小山南側の平地に広がる近世の甲府城下町が重なり合う上府中に位置します。この地域は二の堀と三の堀に囲まれ、「細工町」「大工町」「元連雀町」「新紺屋町」「白木町」などの町人地として栄えていました。

発掘調査では、16世紀代まで遡る溝や土坑などの遺構と、陶磁器、カワラケ、金属製品、墓石、イルカ、イノシシ、鹿の骨の動物遺体など、中世から近世にかけての遺物が検出されました。これらの発見された遺構・遺物は、甲府城下町の中世末から江戸時代の様相を示す、調査研究の重要な資料であり、今後のまちづくりの一助となれば幸いです。

末筆となりましたが、このように発掘調査が実施できましたのも、地域住人皆様のご理解とご協力の賜物であるとともに、発掘調査及び整理事業に従事された皆様方のご努力の結果であります。ここに感謝申し上げますとともに、今後ともご支援・ご協力をお願い申し上げます。

令和5年12月

甲府市教育委員会  
教育長 数野保秋

## 例 言

1. 本書は、山梨県甲府市武田1丁目44番1号に所在する甲府城下町遺跡の発掘調査報告書である。調査象面積は265㎡である。
2. 発掘調査は集合住宅建設事業に伴い、事業者である株式会社マリモの費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、株式会社マリモ、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社に三者協定を締結し、甲府市教育委員会の指導の下、昭和測量株式会社が調査主体となり実施した。  
[調査体制]  
調査担当 高野高潔（昭和測量株式会社文化財調査課）  
調査顧問 新津健（昭和測量株式会社文化財調査課研究顧問）  
発掘従事者 青柳正史・飯沼源治・齊藤里美・坂本健治・佐野香織・内藤敏夫・三木一恵・山本誠・横山忠以・渡辺俊夫  
整理従事者 石坂恵理・尾川正美・垣内律子・齊藤里美・佐野香織・竹中加奈子・広瀬ありさ・三木一恵・渡辺麗子
4. 発掘調査は令和4年8月16日から令和4年10月15日、令和5年5月17日から令和5年6月13日まで行った。整理報告書作成業務は令和5年3月13日から令和5年12月25日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真は高野高潔が撮影した。遺物写真は尾川正美・竹中加奈子が撮影した。
6. 本書の編集は高野高潔が行った。執筆分担は以下の通りである。  
第1章第1節・第2節：志村憲一（甲府市教育委員会）  
第4章第1節：櫻庭陸央氏・山本満梨奈氏（以上、公益財団法人山梨文化財研究所）・植月学（帝京大学文化財研究所）、  
第2節：バンダリ スタルシャン（株式会社パレオ・ラボ）、第3節：竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）、  
その他の執筆は高野高潔が行った。
7. 本調査における木製品および金属製品の保存処理は公益財団法人山梨文化財研究所に、自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 発掘調査および報告書作成にあたって次の方々の御指導と御協力を賜った。深く感謝の意を表する。  
公益財団法人山梨文化財研究所 株式会社パレオ・ラボ 畑大介 三浦麻衣子
9. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会にて保管している。

## 凡 例

1. 本書で使用した地図は第1図：国土地理院発行の地形図『甲府』1/25,000、第2図：甲府市役所発行の都市計画基本図1/2,500である。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構平面図のX・Y座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高（T.P.）を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。
7. 発掘調査では以下の遺構記号を使用した。遺構番号はあらかじめ調査地点ごとに番号を振り分けた上で、種別ごとに番号を付した。本書でも発掘調査時点のものを使用した。  
土坑：SK 小穴：SP 集石遺構・石列：SS 建物跡：SB 溝状遺構：SD 性格不明遺構：SX
8. 遺物番号は出土地点にかかわらず連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
8. 遺構平面図における一点鎖線は掘乱、破線はサブトレンチ・試掘坑・推定線である。
10. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーン（凡例）は以下の通りである。  
墳土範囲（遺構図）  炭化物範囲（遺構図）  石断面   
(遺構図) 煤・油煙・炭化物（遺構図） 
- 黒色処理・黒漆（遺物図）  赤彩・赤漆（遺物図）  付着物・錆（遺物図） 

11. 遺物観察表の法量の計測方法はA口径/軸長、B底径/軸幅、C器高/厚さ、D握み径である。

## 本文目次

序

例言・凡例

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘調査の結果	1
第3節 発掘作業の経過	2
第4節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本層序	6
第3節 調査の成果	8
第4章 自然科学分析	34
第1節 甲府城下町遺跡(武田1丁目44-1)出土の動物遺体	34
第2節 甲府城下町遺跡(武田1丁目44-1)から出土した大型植物遺体	41
第3節 甲府城下町遺跡(武田1丁目44-1)出土の溶融物付着土器の元素マッピング分析	44
第5章 総括	46

## 挿図目次

第1図 試掘トレンチ配置図	2	第11図 遺構(SK12・SK1-3・SK7・SK8・SK10・SP1-7)	21
第2図 遺跡の位置・周辺遺跡分布図	4	第12図 遺物(SX3・SX1・SD4)	22
第3図 調査区全体図	7	第13図 遺物(SD4・SD9・SD2)	23
第4図 遺構(SX3・SD9・SP8)	14	第14図 遺物(SD2)	24
第5図 遺構(SX1・SK13・SK4・SK11)	15	第15図 遺物(SD2)	25
第6図 遺構(SD4・SD7)	16	第16図 遺物(SK13・SD5・SD8・SD7・SK4)	26
第7図 遺構(SD2・SK6)	17	第17図 遺物(SK4・SK5・SK11)	27
第8図 遺構(SD2)	18	第18図 遺物(SS1・SD6・SK1)	28
第9図 遺構(SD5・SD8・SD1・SD6)	19	第19図 遺物(SK2・SK3)	29
第10図 遺構(SX2・SK9・SK5・SS1)	20	第20図 遺物(SD1・遺構外)	30

## 表目次

第1表 周辺の遺跡	5	第2表 遺物観察表	31
-----------	---	-----------	----

## 写真図版目次

図版1 遺構(調査区全景・グリッド配置図)	図版8 遺物(SD4・SD9・SD2)
図版2 遺構(SX3・SP8・SX1・SD4・SD7・SD9・SD2)	図版9 遺物(SD2)
図版3 遺構(SD2・SK6・SK13・SD5・SD8・SD7・SX2)	図版10 遺物(SD2・SK13・SD5・SD8・SD7)
図版4 遺構(SK4・SK5・SK11・SK9・SS1)	図版11 遺物(SK4・SK5・SK11・SS1・SD6)
図版5 遺構(SS1・SD6・SK12・SK1-3・SK7・SP2・SK8)	図版12 遺物(SK1・SK2)
図版6 遺構(SK8・SD1・SK10・SP1・SP3-7)	図版13 遺物(SK3・SD1・遺構外)
図版7 遺物(SX3・SX1・SD4)	

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

集合住宅建設事業に伴い、令和4年5月6日付けで株式会社マリモから文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出が山梨県知事宛に提出された。それに対して山梨県知事から、令和4年5月24日付け文化第791号で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知に基づき、甲府市教育委員会が試掘調査を実施することとなった。

調査対象地は、商業施設ビルおよびアパートの跡地であり824.33㎡の面積がある。甲府城下町遺跡の北側に位置し、近世は「細工町」とよばれる町人地であり、中世の武田城下町と範囲が重なる区域である。

周辺の調査状況等から、調査対象地には古墳時代・中世・近世の遺構・遺物が残存することが想定された。試掘調査により、中世から近世にかけての遺構・遺物が確認された。その結果を受けて事業者と協議を行い、当初235㎡を対象に本調査を実施した。その後、建築物の設計変更に伴い本調査範囲が30㎡追加拡張され、合計で265㎡の本調査を実施した。

本調査は、令和4年7月15日付けで、事業主体者である株式会社マリモと発掘主体者の昭和測量株式会社で発掘調査及び整理作業に関する契約書を締結するとともに、前二者と甲府市教育委員会を含めて埋蔵文化財に関する協定書を締結した。昭和測量株式会社は令和4年7月15日付けで埋蔵文化財に関する届出(92条)を提出した。

## 第2節 試掘調査の結果(第1図)

試掘調査は遺構及び遺物の確認のための調査であり、令和4年6月17日に甲府市教育委員会歴史文化財課文化財保護係の担当職員により実施された。調査区は南北に長い土地であり、北側県道沿いには鉄筋コンクリート5階建ての建物、敷地南側には木造2階建てのアパートが位置していた。試掘調査時は、旧建物は解体撤去され更地であり、東側及び西側にはコンクリートの側溝があった。試掘調査は、建設建物対象部分に合計8本(T-1～T-8)のトレンチを設定し、約42㎡の面積を重機で掘削後人力、遺構・遺物の確認作業を行った。

### 【各トレンチ調査状況】

T-1(調査区北側)トレンチ南北7m×幅1m、深さ約0.8mの掘削。トレンチ南北両側で堆積層の確認を行う。トレンチ中央部を南北方向に埋設管が確認され、さらにトレンチ西側は旧建物により攪乱を受けていた。遺構・遺物は確認されなかった。

T-2(調査区東側 北東隅)トレンチ南北2m×幅1m、深さ約1mの掘削。掘削部分は攪乱層であり、遺構・遺物は検出されなかった。

T-3(調査区東側 南東隅)トレンチ南北2m×幅1m、深さ約1.3mの掘削。表層20cmは攪乱層であり、その下層は黄褐色粘質土の地山層である。遺構・遺物は検出されなかった。

T-4(調査区南側 東より)トレンチ南北10m×幅1m、深さ約0.75mの掘削。黄褐色粘質土直上まで攪乱層が確認され、遺構・遺物ともに検出されなかった。トレンチ南側では、地表下0.4mで地山層となる。

T-5(調査区 T-4 北方 西側)トレンチ東西2m×幅1m、深さ約0.7mの掘削。トレンチ東側は攪乱を受けていたが、西側は暗褐色土の遺物包含層が検出された。

T-6(調査区 T-4 西側)トレンチ東西8.5m×幅1.2m、深さ約0.7mの掘削。トレンチ西側7.8mまでの範囲は暗褐色土の遺物包含層が検出された。

T-7(調査区南西側)トレンチ南北2.5m×幅1.5m、深さ約0.7mの掘削。トレンチ西壁で5層の堆積層を確認した。表土25cmは攪乱層であり、その下層は焼土・炭化物を含む暗褐色土が2層検出された。地

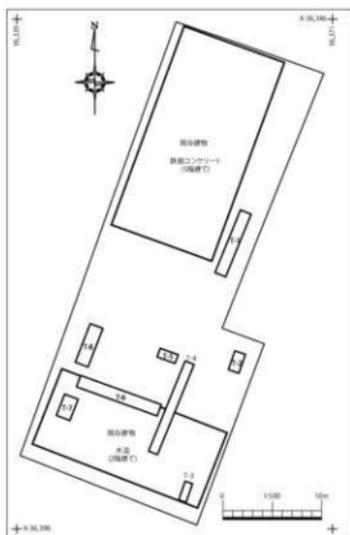
山層の直上の第4層の暗黄褐色粘質土層からは、16世紀代の中国製の白磁皿が検出された。

T-8 (T-7北側) トレンチ南北4.3m×幅1.5m、深さ約0.7mの掘削。T-7トレンチと同様に4層の堆積層の確認をした。トレンチ中央部から土坑と考えられる径約1mの円型の黒褐黒土が確認された。また第3層の暗褐色土内からは、近世の灯明皿と土鈴が出土した。

#### 試掘調査の結果

T-1からT-4のトレンチは、地山層まで攪乱層である。T-5からT-8のトレンチからは焼土・炭化物を含む暗褐色土層が確認され、西側のT-7・8トレンチの暗褐色土層からは中世・近世の遺物及び遺構も確認された。

上記の試掘調査の結果から、敷地西側の建物予定地(南北16m×東西10.5m、一部突出部 合計182.5㎡)、隣地境界擁壁(南側 東西14.5m×幅3m 合計43.5㎡)、隣地境界擁壁(西側 南北3.6m×幅2.5m 合計9㎡)、合計面積235㎡を調査対象範囲として関係者に提示した。その後建築物の設計変更があり、調査対象範囲を北側に30㎡(南北2.85m×東西10.5m)拡張して、最終的に合計面積を265㎡とした。



第1図 試掘トレンチ配置図

### 第3節 発掘作業の経過

調査は令和4年8月16日から令和4年10月15日、令和5年5月17日から令和5年6月13日の期間実施した。また整理作業及び報告書作成業務に関しては、令和5年3月13日から令和5年12月25日までの期間で実施した。調査概略は以下の通りである。

令和4年8月16日 工程現地打合せ、近隣挨拶。18日 重機表土掘削開始。19日 包含層掘削・遺構検出開始。9月5日 遺構検出終了。遺構掘削開始。SD2・SD3・SD4より大窯期の灰軸皿、カワラケ、内耳鍋、溶融物付着カワラケ、五輪塔、志野皿、搦鉢、茶臼、ヒヅ鉢、獣骨等が出土。10月5日 調査区完掘。8日 重機埋め戻し。14日 現場終了。令和5年5月17日 近隣挨拶。27日 重機表土掘削開始。30日 包含層掘削・遺構検出開始。6月1日 遺構検出終了。遺構掘削開始。SX3土師器坏小片出土。8日 調査区完掘。10日 重機埋め戻し。13日 現場終了。

### 第4節 整理等作業の経過

整理・報告書刊行業務は、令和5年3月13日から令和5年12月25日の間、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社文化財調査課の事務所内で行った。

整理作業は遺物の水洗・注記から開始した。遺物の接合・復元・選別作業と進め、実測とトレース、写真撮影などの記録作業を行った後、獣骨の同定を櫻庭陸央氏・山本満梨奈氏(公益財団法人山梨文化財研究所)・植月学氏(帝京大学文化財研究所)にお願いした。土器付着溶融物の成分分析や土壌試料などの自然科学分析については株式会社パレオ・ラボに委託した。現場の調査写真や遺構図面についても順次整理作業を進め、遺物観察表の作成、報告書の挿図・図版の編集、本文執筆と作業を進め、令和5年12月25日に報告書を刊行した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境 (第2図)

甲府城下町遺跡は、16世紀末から17世紀初頭に造営された近世城下町である。甲府盆地北縁部に位置し、北方の山地から流れる相川が形成した扇状地の扇端部にあたる。西側に相川、南側に荒川、北東側に愛宕山(標高423m)の縁部を東へ走る藤川が流れ、それらの河川に囲まれた範囲に立地する。愛宕山から南西方向の一条小山(標高304m)の地には甲府城の天守台が築かれた。甲府城下町は、この天守台を中心として内堀・二の堀・三の堀と、三重の堀を巡らせた城下町である。二の堀の内側は武家屋敷地、その外側は町人地が形成された。

調査地点は、甲府城下町遺跡の北部に位置し、三の堀に囲まれた町人地に該当する場所である。調査地点の北側約150mの地点には三の堀の北辺部が現在も残る。

甲府城下町遺跡全体は、概ね標高260～300mの扇状地斜面に立地する。今回の調査地点の現況地盤の標高は284.6～284.3mであり、城下町では高い場所に立地している。

### 第2節 歴史的環境 (第2図・第1表)

旧石器時代 八幡神社遺跡(42)ではナイフ形石器や切出形石器など4点の石器が見つかった。緑が丘スポーツ公園東側の相川の河床ではナウマンゾウの臼歯の化石が発見されている。出土した地層から8万年前のものだと推定されている。

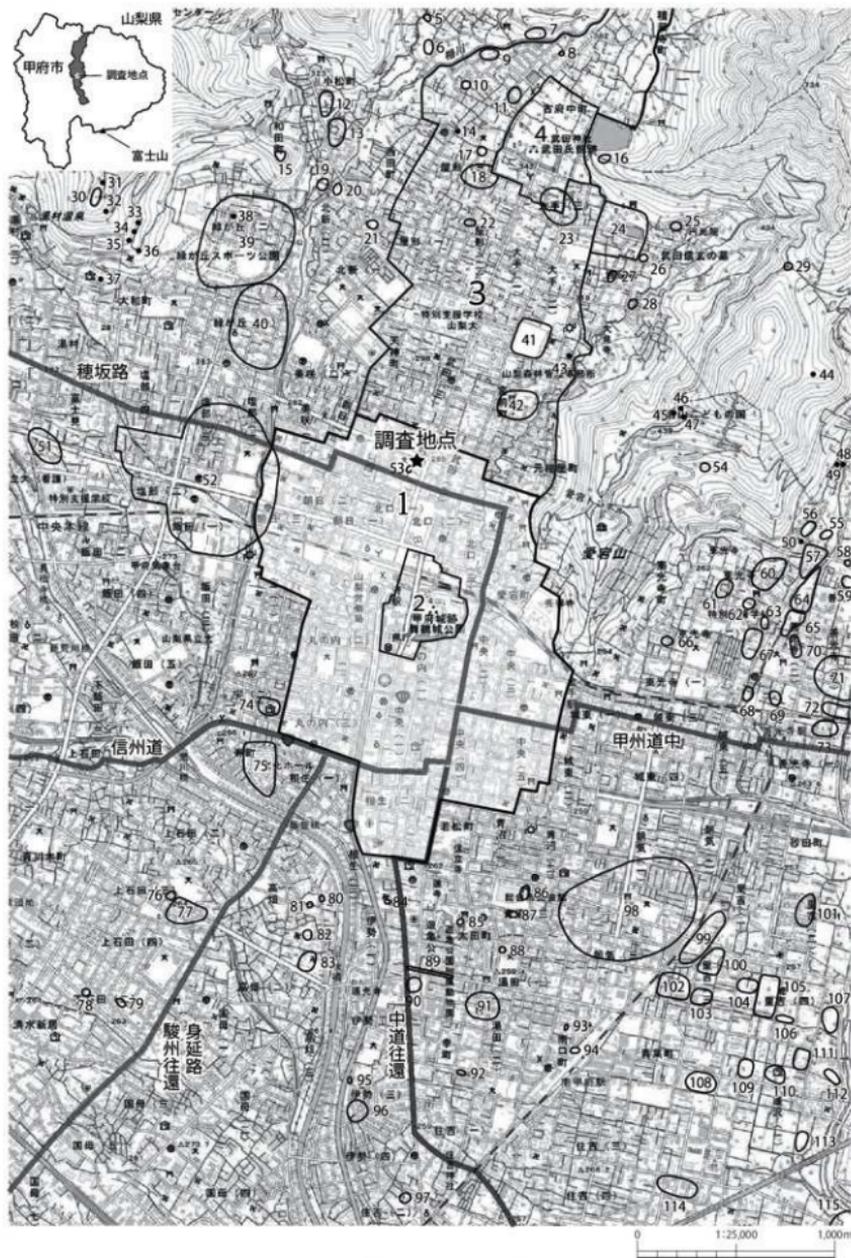
縄文時代 甲府城下町遺跡から荒川を挟んで南西方向には上石田遺跡(77)が存在する。甲府盆地の底部という立地で初めて報告された縄文集落で、竪穴建物2軒、石囲い土坑1基などを検出している。主に中期後半の遺物が出土した。八幡神社遺跡(42)では、主に中期中葉から後葉の土器や土偶が出土した他、黒曜石を主体とする石器や剥片が大量に出土しており、石器製作跡と位置付けられている。集落遺跡としては他に朝気遺跡(98)などがある。

弥生時代 幸町A遺跡(91)では中期後半の土器が出土している。後期以降では遺跡数が増加し、古墳時代や平安時代まで継続する複合遺跡も多い。

古墳時代 緑が丘二丁目遺跡(39)では、弥生後期末から平安の竪穴建物を含めて14軒、掘立柱建物を3軒検出している。中には排水溝を持つ竪穴建物(古墳後期)やカマドをもつ平地式建物(奈良)なども報告されている。塩部遺跡(52)では弥生後期から平安まで継続する集落遺跡である。甲府工業高校地点では4世紀後半とされる方形周溝墓の周溝からウマの歯が出土した他、駿台甲府学園地点では古墳時代後期の流路から織機の部材と推定される木製品をはじめとして多数の木製品が出土している。朝気遺跡(98)では弥生時代末から平安時代の建物の他、弥生時代末の土器棺墓、古墳時代の方形周溝墓、平安時代の伸展葬人骨を伴う土坑墓なども検出している。古墳は、湯村山古墳群(31～36)、万寿森古墳(37)などが位置している。

古代 周辺は巨麻郡9郷のうち青沼郷に属すると推定される地域である。緑が丘二丁目遺跡や塩部遺跡、朝気遺跡などで平安時代の遺構が検出されている。特に朝気遺跡は青沼郷の中心地とも推定されており、竪穴建物集落、伸展葬人骨、人形・田舟・石製巡方・緑釉陶器などが出土している。

中世 後に甲府城(2)が築城される一条小山には、平安時代末に一条忠頼が居館を置いた。後の正和元年(1312)には一条時信により時宗寺院に改められ一蓮寺となった。一蓮寺はその後、武田信虎により小原の地に移されたとされている。武田城下町遺跡(3)は、武田信虎が永正16年(1519)に川田館から躰躰ヶ崎へ居館を移し、開いた城下町である。躰躰ヶ崎館の北には詰城の要害城、西に枝城の湯村山城などを築き、周囲の丘陵に烽火台が設置され要塞化が図られた。館の南側に開かれた城下町には、館の主郭部を軸として



第2図 遺跡の位置・周辺道路分布図

2町(約218m)間隔に設定した5本の南北基幹街路とこれに交差する東西街路が整備され、基幹街路には  
 敵の進入に備えたクランクが設けられた。武田城下町の南辺は近世の甲府城下町と重なっている。

近世 武田氏滅亡後の甲斐国支配は、織田信長から徳川家康へと移り、甲府城築城に着手された。その後支配  
 が豊臣秀吉、徳川家康へと再変する間に城下町整備は引き継がれ、近世を通じ改修や再整備が行われた。城下  
 町の整備にあたっては甲府上水も敷設されている。甲府城下町遺跡(1)は、一条小山に総石垣の平山城として  
 整備された甲府城(2)の周囲に、内堀・二の堀・三の堀と、三重の堀を巡らせた城下町である。二の堀の内側  
 は武家屋敷地、その外側は町人地とされた。町人地は城の北側と南東側に整備された。城の北側の町人地は上府  
 中(古府中)と総称された。上府中では武田時代の商職人町が組み込まれ、26町に区画されている。城の南東側  
 の町人地は、新しく建設されたもので、下府中(新府中)と総称された。南北4条、東西6条の街路が整備され、  
 碁盤目状に23町に区画された。調査地点は上府中の細工町二丁目に該当する。

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	城下町
2	甲府城跡	近世	城跡
3	武田城下町遺跡	中世	城下町
4	武田氏館跡	中世	城館跡
5	西前田A遺跡	中・近世	散布地
6	西前田B遺跡		散布地
7	不動遺跡	近世～	散布地
8	日影遺跡		散布地
9	御馬屋小路A遺跡	中世	散布地
10	御馬屋小路B遺跡		散布地
11	土屋氏館跡	中世	城館跡
12	十二天遺跡	平安	散布地
13	永井遺跡	古墳・平安	散布地
14	お塚さん古墳	古墳・平安	古墳
15	三光寺山遺跡	古墳・平安	古墳
16	藤岡ヶ崎寺跡	中世	城館跡
17	峰本南A遺跡	近世	寺院跡
18	峰本南B遺跡	近世	散布地
19	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
20	向田A遺跡	弥生～古墳	散布地
21	向田B遺跡		散布地
22	長原遺跡	中世	包蔵地
23	大手下遺跡	縄文	散布地
24	水殿寺跡	近世	寺院跡
25	岩窪C遺跡	古墳	散布地
26	中道東遺跡	近世	散布地
27	中道西遺跡	古墳	散布地
28	岩窪遺跡	奈良～中世	包蔵地
29	茶室跡火台	中世	城館跡
30	湯村山城跡	中世	城館跡
31	湯村山6号古墳	古墳	古墳
32	湯村山5号古墳	古墳	古墳
33	湯村山4号古墳	古墳	古墳
34	湯村山3号古墳	古墳	古墳
35	湯村山2号古墳	古墳	古墳
36	湯村山1号古墳	古墳	古墳
37	万寿森古墳	古墳	古墳
38	和田無名墳	古墳	古墳
39	緑が丘二丁目遺跡	縄文～平安	集落跡
40	緑が丘一丁目遺跡	古墳	集落跡
41	山梨大学遺跡	奈良・平安	包蔵地
42	八幡神社遺跡	縄文	散布地
43	コツ塚古墳	古墳	古墳
44	一ツ塚古墳	古墳	古墳
45	二ツ塚1号墳	古墳	古墳
46	二ツ塚2号墳	古墳	古墳
47	二ツ塚3号墳	古墳	古墳
48	善光寺塚1号墳	古墳	古墳
49	善光寺塚2号墳	古墳	古墳
50	北原無名1号墳	古墳	古墳
51	富士山遺跡	古墳・平安	散布地
52	塩津遺跡	弥生～平安	集落跡
53	新田屋小学校遺跡	近世	散布地
54	大笠山水の元遺跡	古墳～平安	散布地
55	堰下A遺跡	平安～	散布地
56	堰下B遺跡	平安～	散布地
57	北原遺跡	縄文・平安	集落跡
58	善光寺裏遺跡	縄文～平安	散布地
59	南善光B遺跡	古墳～平安	散布地
60	地蔵北遺跡	古墳～平安	散布地
61	亥ノ尾遺跡	平安～	散布地
62	大六天遺跡	平安～	散布地
63	宮宮遺跡	平安～	散布地
64	宮の脇A遺跡	縄文・平安～	散布地
65	宮の脇B遺跡	縄文・平安～	散布地
66	御崎田遺跡	平安	散布地
67	銀杏の木	平安～	散布地
68	東光寺遺跡	平安～	散布地
69	宮の前遺跡	縄文	散布地
70	上郷遺跡	平安～	散布地
71	本郷遺跡	縄文・古墳～	包蔵地
72	本郷B遺跡	平安～	散布地
73	本郷C遺跡	古墳～中世	散布地
74	宝町遺跡	縄文・平安	散布地
75	春町遺跡	古墳～	散布地
76	上石田B遺跡	平安	散布地
77	上石田遺跡	縄文	集落跡
78	上河原遺跡	平安～	散布地
79	渋沢遺跡	平安～	散布地
80	久保北河原遺跡	平安	散布地
81	大北河原遺跡	平安	散布地
82	宮北遺跡	縄文・平安	散布地
83	秋山氏館跡	中世	城館跡
84	千松院遺跡	中世～	散布地
85	太田町遺跡	古墳～	散布地
86	善沼遺跡	古墳	包蔵地
87	青沼三丁目遺跡	中世～	散布地
88	湯田一丁目遺跡	古墳	散布地
89	伊勢町遺跡	古墳	包蔵地
90	倉庫工場遺跡	縄文・弥生	包蔵地
91	幸町A遺跡	弥生	包蔵地
92	幸町B遺跡	古墳	散布地
93	南口A遺跡	平安	散布地
94	南口B遺跡	平安	散布地
95	木長遺跡	近世	散布地
96	般若院跡	中世	寺院跡
97	住吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
98	朝雲遺跡	縄文～平安	集落跡
99	里古天神遺跡	古墳～平安	散布地
100	家之前遺跡	平安～	散布地
101	中坪遺跡	古墳	散布地
102	十丁遺跡	古墳	散布地
103	十丁B遺跡	古墳	散布地
104	字前A遺跡	古墳	散布地
105	字前B遺跡	古墳	散布地
106	字前C遺跡	古墳	散布地
107	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
108	青葉町遺跡	平安	散布地
109	北坂遺跡	平安	散布地
110	野村遺跡	古墳～平安	散布地
111	油田遺跡	平安	散布地
112	居村遺跡	近世	散布地
113	源之上遺跡	古墳	包蔵地
114	二又遺跡	古墳	包蔵地
115	外河原テケヤ遺跡	古墳～平安	散布地

※2町および第1表は、甲府市教育委員会発行の「甲府市遺跡地図(平成4年)」をもとに、現在までに範囲等の情報が更新された遺跡については、更新後の情報を反映し作成した。

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法（第3回）

武田1丁目44-1地点は市街地であり、事業敷地内には鉄筋コンクリート5階建ての商業施設と木造2階建てのアパートが建っていた。調査時には全て解体され更地であったため、一度に全域の表土掘削を行い掘削土の仮置きも敷地内で行った。敷地内に残る水道管など地下埋設物の敷設範囲は調査区から除外されていたが、把握しきれていない可能性を考慮し慎重に重機による表土掘削を行った。表土掘削は、0.4m相当のバックホウを用いた。掘削土はブルーシートで覆って養生し、近隣への土砂の飛散防止を図った。埋め戻しは掘削土を用いて行った。調査地点はネットフェンスで仮囲いした上で、視認性の高い安全コーンを設置した。

調査では、現状の市街の区画を基準として南北にアルファベットA～E・Z、東西に数字1・2の名を付して5mグリッドを設定した。1A～3Eグリッドを一度に調査を行い、後に1Z・2Zグリッドを追加調査するという形で進めた。発掘調査では戦災焼土層と明らかに現代と判断できる土層までをバックホウによる表土掘削の対象とした。それより下位については壁面で土層確認しながら人力で掘り下げを行った。土層では遺物包含層が確認できる箇所があり、人力で地山上面まで掘り下げて遺構確認を行った。遺構掘削は全て人力で行った。遺構検出状況は写真や概略図などで記録した。遺構番号は調査を行った順に付した。

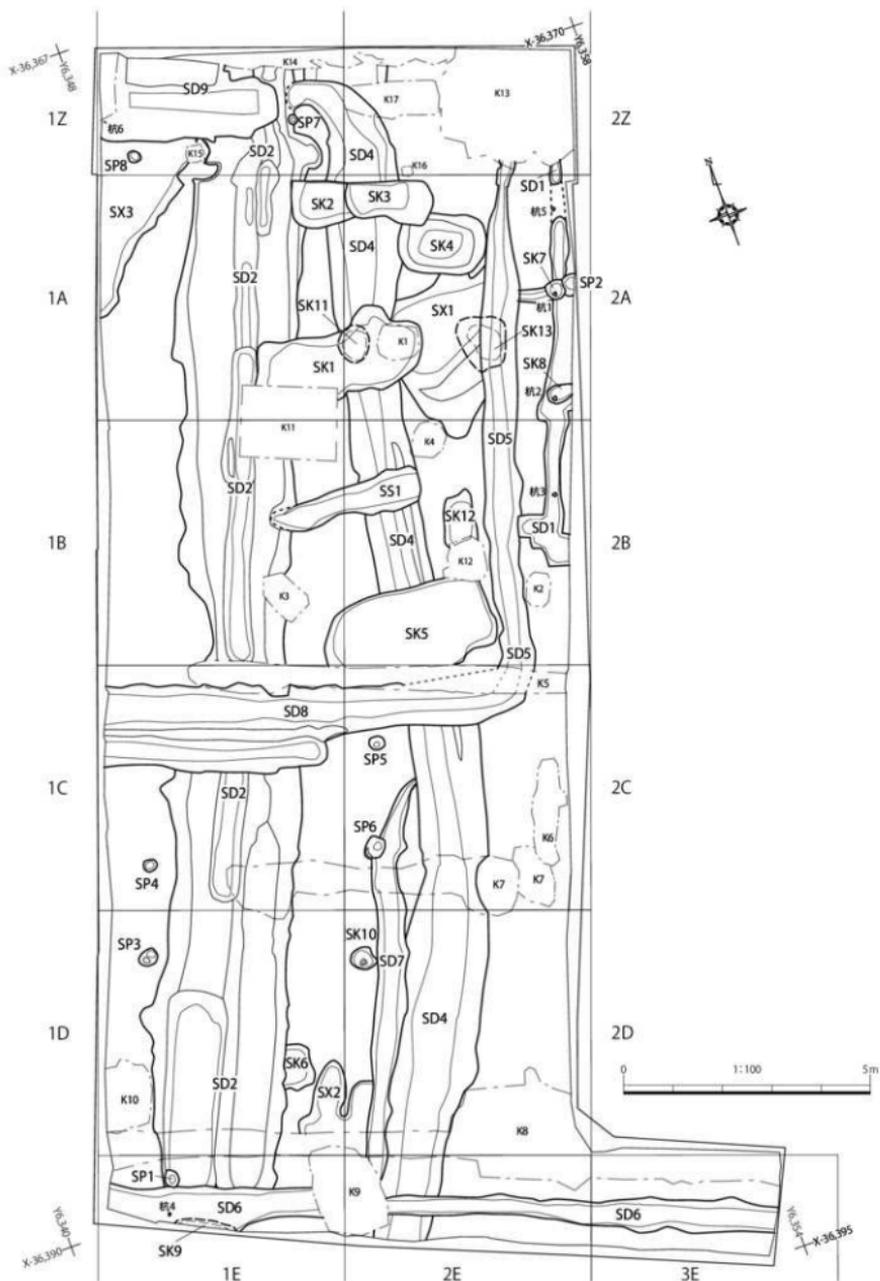
遺構測量は、土層断面は手描き実測にて行い、平面図はトータルステーションによる測量と写真測量を併用した。写真測量は主にボール撮影で行った。測量図化システムとしてCUBIC社「遺構くん」、写真測量にはAgiSoft社「PhotoScan Professional」を用いた。完掘時には完掘状況の全体写真撮影と合わせてボール写真撮影を行い、「PhotoScan Professional」を用いてオルソモザイク写真を作成した。遺物は原則的にトータルステーションを使用して位置を記録して取り上げた。小片については、遺構出土のものは遺構一括とし、遺構外出土遺物についてはグリッドごと一括して取り上げた。遺構写真撮影にはデジタル一眼レフカメラ（NikonD7200）を使用した。調査終了時には甲府市教育委員会の確認を受けた。

整理作業は遺物の水洗、注記、接合、復元と進めつつ、実測遺物・分析試料・保存処理遺物を選定した。選定にあたっては甲府市教育委員会の確認を受けた。土壌試料等の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。写真撮影はデジタル一眼レフカメラ（NikonD7500）を用いた。遺物実測は手描きで行い、染付などの図化については手描き実測図のトレースデータに補正した写真データを合成した。また、遺物実測の一部はキーエンス社製3Dスキャナ型三次元測定機「VL300シリーズ」を用いた。デジタルトレース、写真データの補正、挿入・写真図版作成、報告書編集作業にはadobe社製「IllustratorCC」、「PhotoshopCC」、「InDesignCC」をそれぞれ使用した。陶磁器類の分類や遺物観察表の記載については『内藤町遺跡』（新宿区内藤町遺跡調査会他1992）、『甲府城下町遺跡（甲府駅周辺土地区画整理事業地内43街区）』（山梨県埋蔵文化財センター2004）を参考とし、『甲府城下町遺跡29』（甲府市教育委員会2022）の報告に準拠することとした。

### 第2節 基本層序

調査区は北から南へ向かってゆるやかに低くなる地形である。現況地盤の表土面の標高は284.6～284.3m、最終的な遺構検出面とした地山上面の標高は284.2～283.3mを測る。地山上面の方が傾斜が急であり、土地利用の過程で、敷地北側の道路面に対しより平坦な区画の土地へと変化している。

事業敷地内には鉄筋コンクリート5階建ての商業施設と木造2階建てのアパートが建っていたため、調査区内の広範な範囲では地山上面まで掘乱が生じていた。土層が良好に遺存した箇所で見られる基本層序は地表から25cmまで表土が堆積し、以下25cmが焼土・炭化物を含む暗褐色土層で近世の遺物を包含する土層、更に下の20cmが暗黄褐色粘質土層で中世の遺物を包含する土層、その下で黄褐色粘土質の地山層が堆積する。



第3図 調査区全体図・グリッド配置図

### 第3節 調査の成果 (第2・3図)

調査区の位置は近世甲府城下町北端の上府中細工町二丁目にあたる。また中世では、武田城下町の南部に含まれる範囲とされている。調査の結果、遺構は中世から近代にわたる土坑13基、溝8条、石列3条、小穴8基、杭6本、不明遺構3基を検出した。遺物は主に中世末から近世初頭の土器(カワラケなど)、陶器(大塚瀬戸美濃系、志野焼など)、磁器(染付貿易陶磁など)、古銭(渡来銭など)、石製品(茶臼、ヒデ鉢など)と近代の陶磁器、ガラス製品などが出土した。遺物の出土量はプラスチックコンテナ(59×38×20cm)で7箱分出土した。以下に時代順に検出遺構、出土遺物を記す。

#### 古墳時代～平安時代

##### SX3 (第4・12図、図版1・2・7)

[位置・検出状況・重複] 1Z・1Aグリッドにまたがって位置し、調査区西壁に切られる。地山上面で検出した。重複関係はSD9より古い。SP8は同一と推測する。

[形状・規模・埋土] 竪穴状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ4m、幅2m、深さ20cmを測る。掘方の断面形はやや方形に近い。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器が少量出土した。1・2は土師器の坏、3・4は甕である。古墳時代と推測する。

##### SP8 (第4図、図版1・2)

[位置・検出状況・重複] 1Zグリッド内に位置する。SX3底面で検出した。重複関係はSX3は同一と推測する。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は楕円形である。長軸30cm、短軸20cm、深さ30cmを測る。掘方の断面形は楕円状である。埋土は黒色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器小片が2点出土した。時期は古墳時代と推測する。

#### 中世末～近世初頭

##### SX1 (第5・12図、図版1・2・7)

[位置・検出状況・重複] 2A・2Bグリッドにまたがって位置する。地山上面で検出した。重複関係はSD4・SD5・SK1・SK4・SK13より古い。

[形状・規模・埋土] 不整形な窪み状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ3.4m、幅2.1m、深さ15cmを測る。掘方の断面形はやや方形に近い。埋土にはぶい黄褐色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 陶器、土器、石製品が出土した。1は陶器碗天目茶碗、2は陶器向付で筒形である。3・4は土器カワラケである。5は磨石である。時期は中世末から近世初頭である。

##### SD4 (第6・12・13図、図版1・2・7・8)

[位置・検出状況・重複] 1Z・2Z・1A・2A・2B・2C・2D・2Eグリッドを通して南北方向に延びて位置し、調査区北壁と南壁に切られる。地山上面で検出した。重複関係はSD2・SD6・SD7・SD8・SK1・SK2・SK3・SK5・SK11・SS1・SX1より古い。

[形状・規模・埋土] 溝状。南北に延び北端で屈曲する。検出部分では長さ24m、幅1～2m、深さ20～50cmを測る。掘方の断面形は楕円状である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、部分的に下層で水性堆積の砂層がみられる。上層では一部に石列が埋め込まれる。

[出土遺物・時期] 陶器、土器、土師器、石製品、銭貨、金属製品、獣骨が出土した。1は陶器灰釉皿丸皿、2は甕である。3～15は土器カワラケで、6は内面に溶融金属付着する。被熱により胎土が灰色に変色、成分分析結果から青銅類の銅合金あるいは赤銅(銅と金の合金)類の溶解に利用されたと考えられる。16は土師器坏、17は羽釜である。18は土器搥鉢、19は鉢、20～23は鍋で、22は内耳鍋、23は外耳鍋である。24は凹み石、25は正隆元宝である。金国で1185年に初鑄された渡来銭である。26は耳かき状の銅製品である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SD9 (第4・13図、図版1・2・8)

[位置・検出状況・重複] 1Zグリッド内に位置し、調査区北壁と西壁に切られる。地山上面で検出した。重複関係はSX3より新しく、SD2より古い。杭6が重なる。

[形状・規模・埋土] 溝状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ3.6m、幅1.7m、深さ95cmを測る。掘方の断面形は播鉢状で、西側では底面に段が付く。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土を基調とする。

[出土遺物・時期] 陶器、土器、獣骨が少量出土した。1は陶器播鉢、2は土器カワラケである。時期は中世末から近世初頭である。

#### SD2 (第7・8・14・15図、図版1～3・8～10)

[位置・検出状況・重複] 1Z・1A・1B・1C・1D・1Eグリッドを通して南北方向に延びて位置し、調査区北壁に切られる。地山上面で検出した。重複関係はSD4・SD9より新しく、SD6・SD8・SK1・SS1・SP1より古い。現場調査時はSD2とSD3に分けて調査を進めていたが、最終的に明確に分離できないと判断しSD2として統合した。(第4章自然科学分析では統合前のSD2とSD3の名称で記載している。)SD2は埋土堆積状況から一度埋まった後に、同一の場所で2回掘り直した溝と考える。3回目には一部に石列を並べている。

[形状・規模・埋土] 溝状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ23.5m、幅1.5～3m、深さ40～70cmを測る。掘方の断面形は播鉢状の複合で、部分的に底面が溝状に深く掘りこまれる。埋土は褐色砂質シルトを基調とし、焼土・炭化物を粒状に含む。

[出土遺物・時期] 陶器、土器、土師器、石製品、銭貨が出土した。1～9は陶器灰釉皿で、1は端反皿、2・3は丸皿、4は内丸皿、9菊皿である。10は陶器碗天目茶碗、11は陶器鉢、12～14は甕である。15～22は土器カワラケ、23は焼塩壺、24は鍋、25・26は火鉢である。27は薄く摩耗した銭貨で銭名は不明である。28・29は石製品ヒデ鉢、30・31は磨石、32～34凹み石、35は五輪塔地輪、36は鉛丹で赤彩した珠、37は近代から混入した石盤である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SK6 (第7図、図版1・3)

[位置・検出状況・重複] 1Dグリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複関係はSD2より古い。

[形状・規模・埋土] 土坑。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ90cm、幅60cm、深さ5cmを測る。掘方の断面形は播鉢状である。埋土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 焼成粘土塊片が1点出土した。時期は不明である。

#### SK13 (第5・16図、図版1・3・10)

[位置・検出状況・重複] 2Aグリッド内に位置する。SX1とSD5の底面で検出した。重複関係はSX1・SD5より古い。

[形状・規模・埋土] 土坑。平面形は不整形である。長さ1.1m、幅1m、深さ20cmを測る。掘方の断面形は播鉢状である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 陶器が出土した。1・2は陶器小坏、3は大皿である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SD5 (第9・16図、図版1・3・10)

[位置・検出状況・重複] 2Z・2A・2B・2Cグリッドを通して南北方向に延びて位置し、北端と南端で攪乱に切られる。南端は東西方向に延びるSD8に接続すると推定される。地山上面で検出した。重複関係はSK13・SX1より新しく、SD8と同一、SD1より古い。

[形状・規模・埋土] 溝状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ10.5m、幅30～80cm、深さ15cmを測る。掘方の断面形は播鉢状である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 陶器が少量出土した。1は陶器碗、2は播鉢である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SD8 (第9・16図、図版1・3・10)

[位置・検出状況・重複] 1C～2Cグリッドを通して東西方向に延びて位置し、西端で調査区西壁に切

られ、東端で攪乱に切られる。東端は南北方向に延びるSD5に接続すると推定される。地山上面で検出した。重複関係はSD2・SD4より新しく、SD5と同一である。

[形状・規模・埋土] 溝状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ8.5m、幅1～1.8m、深さ10～30cmを測る。掘方の断面形は掃鉢状の複合である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 磁器と陶器が出土し、1は磁器皿、2は陶器甕である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SD7 (第6・16図、図版1～3・10)

[位置・検出状況・重複] 2C・2D・2Eグリッドを通して南北方向に延びて位置し、南端で攪乱に切られる。北端はやや屈曲しながら浅くなり途切れる。地山上面で検出した。重複関係はSD4・SX2より新しく、SP6より古い。

[形状・規模・埋土] 溝状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ8.1m、幅20～80cm、深さ10cmを測る。掘方の断面形は皿状である。埋土は褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土器と貨幣が少量出土した。1は土器カワラケである。2は元祐通宝である。初鑄年1086年の北宋銭である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SX2 (第10図、図版1・3)

[位置・検出状況・重複] 1D・2Dグリッドにまたがって位置する。地山上面で検出した。重複関係はSD7より古い。

[形状・規模・埋土] 不整形な窪み状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ1.5m、幅1.4m、深さ5cmを測る。掘方の断面形は皿状である。埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。時期は不明である。

#### SK4 (第5・16・17図、図版1・4・11)

[位置・検出状況・重複] 2Aグリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複関係はSD4・SK3・SX1より新しい。

[形状・規模・埋土] 土坑。平面形は隅丸長方形である。長軸は東西方向で、長さ1.8m、幅1.2m、深さ85cmを測る。掘方の断面形は隅丸方形に近い。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、焼土を塊状に含む。

[出土遺物・時期] 陶器、土器、石製品が出土した。1は陶器掃鉢、2は大皿である。3は土器カワラケ、4は脚部のような筒状部分である。5は石製品茶臼、6はヒデ鉢である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SK5 (第10・17図、図版1・4・11)

[位置・検出状況・重複] 1B・2Bグリッドにまたがって位置する。地山上面で検出した。重複関係はSD4より新しい。

[形状・規模・埋土] 土坑。南側で攪乱に切られるが、平面形は長方形に近い。検出部分では長さ3.5m、幅1.8m、深さ10cmを測る。掘方の断面形は皿状である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土器が出土し、1～3はカワラケ、4は鉢である。時期は中世末から近世初頭である。

#### SK11 (第5・17図、図版1・4・11)

[位置・検出状況・重複] 1A・2Aグリッドにまたがって位置する。SK1底面で検出した。重複関係はSD4より新しく、SK1より古い。

[形状・規模・埋土] 土坑。平面形は楕円形である。長軸80cm、幅60cm、深さ35cmを測る。掘方の断面形は方形である。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、焼土を塊状に含む。

[出土遺物・時期] 土器が出土し、1は土器の掃鉢である。中世末から近世初頭と推測する。

#### SK9 (第10図、図版1・4)

[位置・検出状況・重複] 1Eグリッド内に位置し、調査区南壁に切られる。地山上面で検出した。重複関係はSD6より古い。

[形状・規模・埋土] 土坑。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ1.3m、幅20cm、深さ40cmを

測る。掘方の断面形は方形にやや近い。埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とし、焼土・炭化物を粒状に含む。  
[出土遺物・時期] カワラケ小片が1点出土した。時期は不明である。

#### S S 1 (第10・18図、図版1・4・5・11)

[位置・検出状況・重複] 1B・2Bグリッドにまたがり東西に延びて位置し、西端はS D 2・S D 3に重なり、東端は浅くなり途切れる。地山上面で検出した。重複関係はS D 2、S D 4より新しい。

[形状・規模・埋土] 溝状・暗渠。平面形は長方形である。検出部分では長さ3.2m、幅60～90cm、深さ20cmを測る。掘方の断面形は方形に近い。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 遺構検出時に暗渠蓋石に混じり陶器が1点出土した。1は志野の皿である。時期は中世末から近世初頭である。

### 近世～近代

#### S D 6 (第9・18図、図版1・5・11)

[位置・検出状況・重複] 1E・2E・3Eグリッドを通して東西方向に延びて位置し、調査区東壁と西壁に切られる。地山上面で検出した。重複関係はS D 2、S D 4、S K 9より新しい。杭4が重なる。

[形状・規模・埋土] 溝状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ13.5m、幅30～80cm、深さ10cmを測る。掘方の断面形は方形に近い。埋土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 図示した遺物の他は磁器碗、陶器徳利・土瓶の小片3点のみである。1は陶器土瓶、2は土器棍戸類である。時期は近世から近代と推測する。

#### S K 12 (第11図、図版1・5)

[位置・検出状況・重複] 2Bグリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複する遺構はない。

[形状・規模・埋土] 土坑。南側で攪乱に切られるが、平面形は長方形に近い。検出部分では長さ1.0m、幅70cm、深さ20cmを測る。掘方の断面形は方形である。埋土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 陶器香炉口縁部小片・碗口縁部小片と黒曜石小片の3点が出土した。時期は近世から近代と推測する。

#### S K 1 (第11・18図、図版1・5・12)

[位置・検出状況・重複] 1A・2Aグリッドにまたがって位置する。地山上面で検出した。重複関係はS D 2、S K 11、S X 1より新しい。

[形状・規模・埋土] 土坑。南西側で攪乱に切られるが、平面形は長方形に近い。検出部分では長さ3.4m、幅1.8m、深さ20cmを測る。掘方の断面形は不整形な皿状である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 磁器、陶器、ガラス製品が出土した。1～5は磁器碗、6～8は皿、9は鉢、10は酒杯、11は薄手酒杯である。12は陶器碗、13はガラス製品調味料瓶、14は染料瓶、15は薬瓶である。時期は近代である。

#### S K 2 (第11・19図、図版1・5・12)

[位置・検出状況・重複] 1A・2Aグリッドにまたがって位置する。地山上面で検出した。重複関係はS D 2・S D 3、S D 4より新しく、S K 3より古い。

[形状・規模・埋土] 土坑。平面形の長方形に近いと推定する。検出部分では長さ1.1m、幅1m、深さ15cmを測る。掘方の断面形は方形である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、炭化物を粒状に含む。

[出土遺物・時期] 磁器、陶器、ガラス製品が出土した。1は磁器碗、2は台付鉢盂洗、3は皿、4は蓋、5は小環である。6は陶器碗、7はガラス製品翻瓶、8は染料瓶、9は薬瓶である。10は円盤状の磁器である。時期は近代である。

#### S K 3 (第11・19図、図版1・5・13)

[位置・検出状況・重複] 2Aグリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複関係はS D 4・S K 2・S K 4より新しい。

[形状・規模・埋土] 土坑。平面形の長方形に近い。長さ 1.8m、幅 90cm、深さ 20cmを測る。掘方の断面形は方形である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、炭化物を粒状に含む。

[出土遺物・時期] 磁器、ガラス製品、土製品が出土した。1は磁器鉢、2は鬼面の小杯、3は洋皿である。4・5はガラス製品薬瓶、6は土製品の土玉である。時期は近代である。

#### S K 7 (第 11 図、図版 1・5)

[位置・検出状況・重複] 2 A グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複関係は S P 2 より新しく、S D 1 より古い。杭 1 が重なる。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は円形である。直径 40cm、深さ 10cmを測る。掘方の断面形は楕円状である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] カワラケ片が 1 点出土した。時期は不明である。

#### S P 2 (第 11 図、図版 1・5)

[位置・検出状況・重複] 2 A グリッド内に位置し、調査区東壁に切られる。重複関係は S K 7・S D 1 より古い。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形の円形と推定する。検出部分では長さ 40cm、幅 20cm、深さ 20cmを測る。掘方の断面形は中央部が深くなる不整形な楕円状である。埋土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 焼成粘土塊片が 1 点出土した。時期は不明である。

#### S K 8 (第 11 図、図版 1・5・6)

[位置・検出状況・重複] 2 A グリッド内に位置し、調査区東壁に切られる。重複関係は S D 1 より古い。杭 2 が重なる。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は楕円形と推定する。検出部分では長さ 60cm、幅 40cm、深さ 20cmを測る。掘方の断面形は方形である。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。時期は不明である。

#### S D 1 (第 9・20 図、図版 1・6・13)

[位置・検出状況・重複] 2 Z・2 A・2 B グリッドを通して南北方向に延びて位置し、北端は攪乱に切られる。南端は屈曲し調査区東壁に切られる。地山上面で検出した。重複関係は S K 7・S K 8・S P 2 より新しい。杭 5・杭 1・杭 2・杭 3 が列状に重なる。

[形状・規模・埋土] 溝状。平面形の全容は不明である。検出部分では長さ 8.2m、幅 30～80cm、深さ 10cmを測る。掘方の断面形は皿状である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 磁器、陶器が少量出土した。1は磁器碗、2は陶器碗である。時期は近代である。

#### S K 10 (第 11 図、図版 1・6)

[位置・検出状況・重複] 2 D グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複する遺構はない。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は円形である。直径 40cm、深さ 5cmを測る。掘方の断面形は皿状である。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土器小片が 1 点出土した。時期は不明である。

#### S P 1 (第 11 図、図版 1・6)

[位置・検出状況・重複] 1 E グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複関係は S D 2 より新しい。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は楕円形である。長軸 40cm、短軸 30cm、深さ 10cmを測る。掘方の断面形は楕円状である。埋土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。時期は不明である。

#### S P 3 (第 11 図、図版 1・6)

[位置・検出状況・重複] 1 D グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複する遺構はない。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は楕円形である。長軸 40cm、短軸 30cm、深さ 30cmを測る。掘方の断

面形は中央が深い方形である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。時期は不明である。

**S P 4** (第 11 図、図版 1・6)

[位置・検出状況・重複] 1 C グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複する遺構はない。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は円形である。直径 25cm、深さ 20cm を測る。掘方の断面形は方形である。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。時期は不明である。

**S P 5** (第 11 図、図版 1・6)

[位置・検出状況・重複] 2 C グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複する遺構はない。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は円形である。直径 30cm、深さ 30cm を測る。掘方の断面形は方形である。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土器片(カワラケ)が 1 点と焼成粘土塊片が 1 点出土した。時期は不明である。

**S P 6** (第 11 図、図版 1・6)

[位置・検出状況・重複] 2 C グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複関係は S D 7 より新しい。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は不整な楕円形である。長軸 50cm、短軸 40cm、深さ 30cm を測る。掘方の断面形は楕円状である。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。時期は不明である。

**S P 7** (第 11 図、図版 1・6)

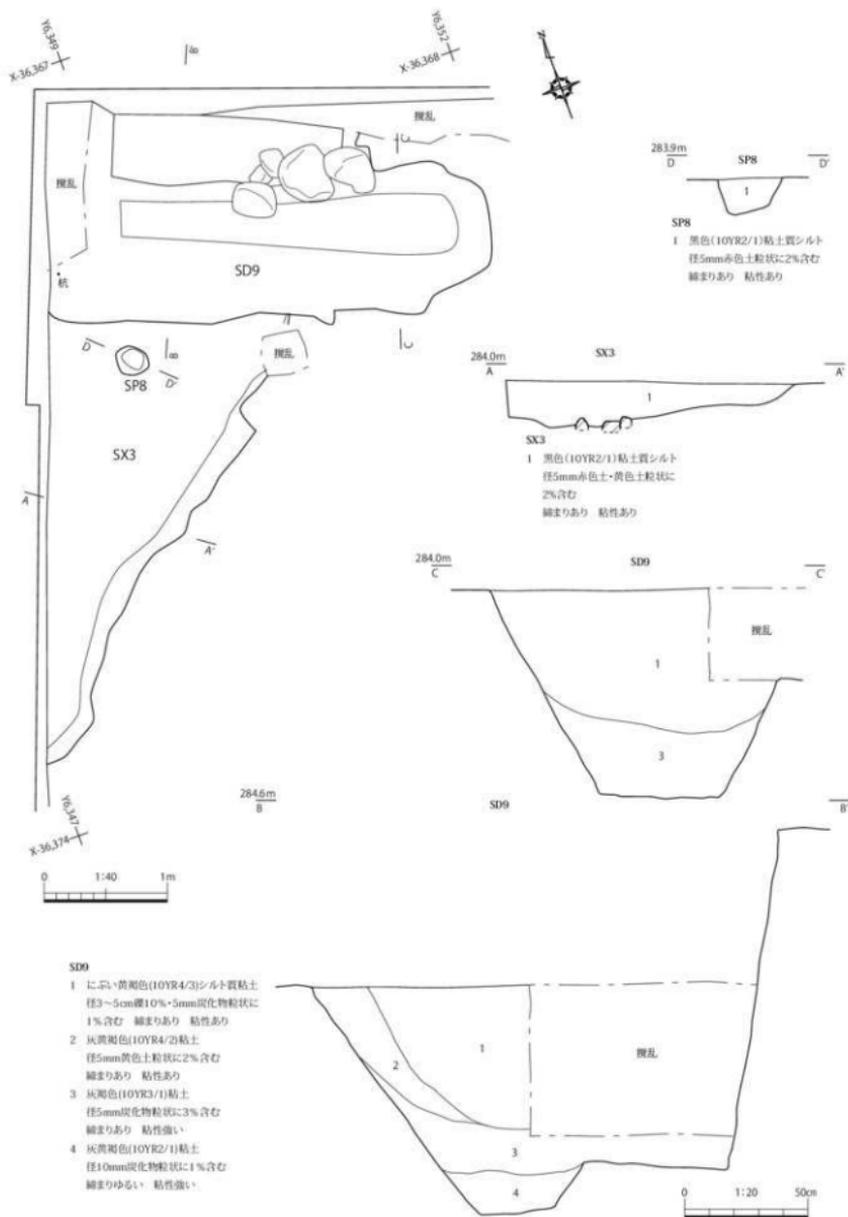
[位置・検出状況・重複] 1 Z グリッド内に位置する。地山上面で検出した。重複関係は S D 2 より新しい。

[形状・規模・埋土] 小穴。平面形は円形である。直径 15cm、深さ 10cm を測る。掘方の断面形は楕円状である。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調とする。

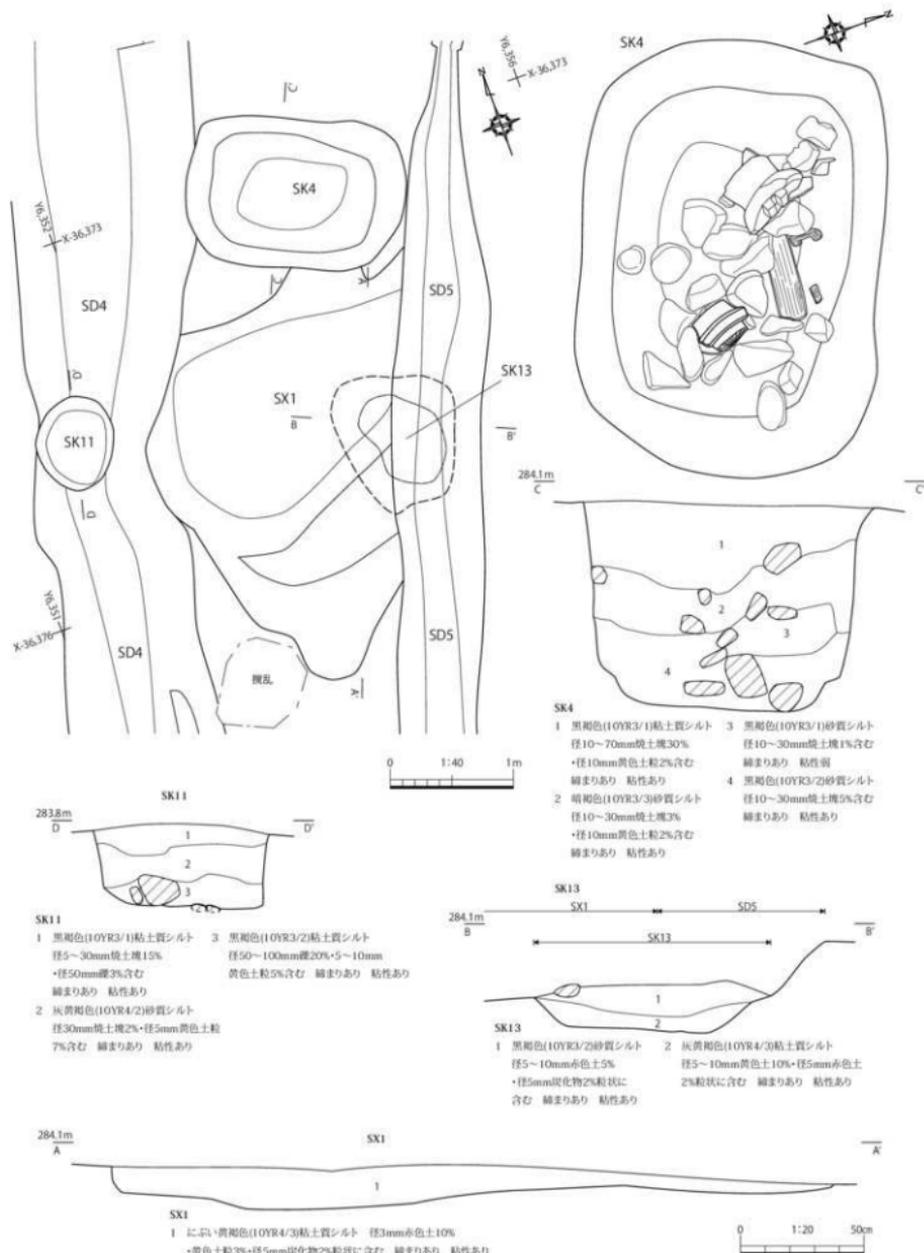
[出土遺物・時期] 土器小片が 1 点出土した。時期は不明である。

**遺構外出土遺物** (第 20 図、図版 1・13)

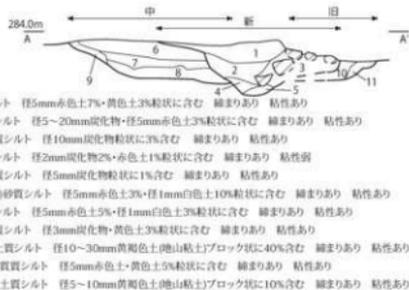
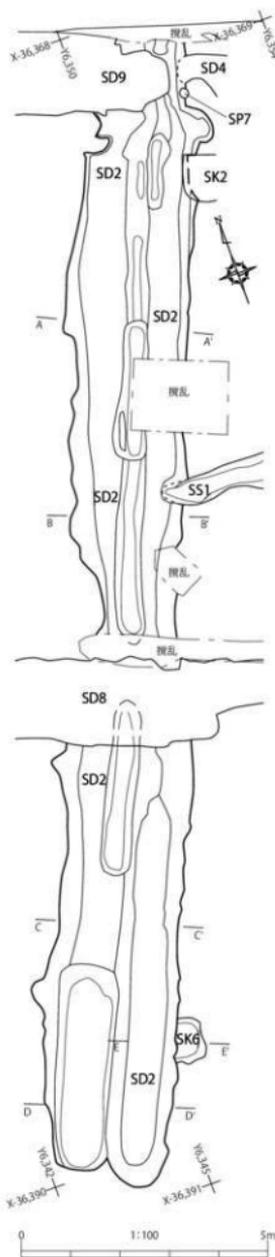
[出土遺物・時期] 1・2 は磁器碗、3 は小杯、4 は蓋、5・6 は段重、7 は徳利、8 は紅皿、9 は蓋、10 はネジ口の磁器瓶、11 は統制陶器の磁器碗、12 は器台形土製品、13 はガラス製品化粧瓶、14 はインク瓶、15 は薬瓶、16・17 は染料瓶、18 は注射器、19 はアンプル瓶、20 は磁器集緒器、21 は磁器絵具皿、22 はガラス製品おはじき、23 は土製品碁石、24 は土玉である。時期は 1・2・5～8 は近世、3・4、9～24 は近代である。



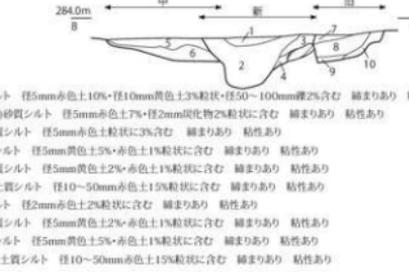
第4図 遺構 (SX3・SD9・SP8)



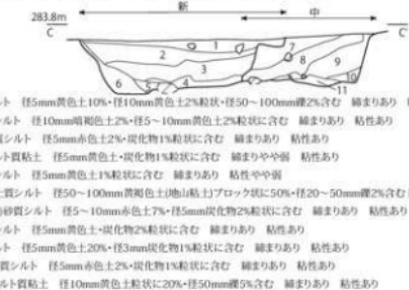




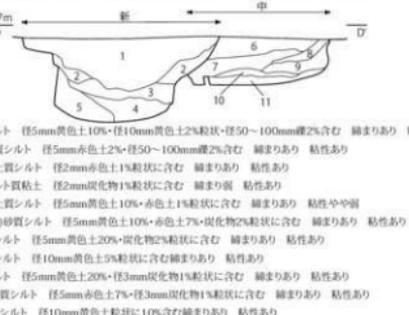
- SD2
- 1 褐色(10YR4/4)砂質シルト 径5mm赤色土7%・黄色土3%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 2 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト 径5~20mm炭化物・径5mm赤色土3%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 3 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト 径10mm炭化物粒状に3%含む 締まりあり 粘性あり
  - 4 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト 径2mm炭化物2%・赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性弱
  - 5 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト 径5mm炭化物粒状に1%含む 締まりあり 粘性あり
  - 6 二色・黄褐色(10YR4/3)砂質シルト 径5mm赤色土3%・径1mm白色土10%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 7 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト 径5mm赤色土5%・径1mm白色土3%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 8 黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト 径3mm炭化物・黄色土3%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 9 暗褐色土(10YR3/3)粘土質シルト 径10~30mm黄褐色土(地山粘土)ブロック状に40%含む 締まりあり 粘性あり
  - 10 暗褐色土(10YR3/3)粘土質シルト 径5mm赤色土・黄色土5%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 11 暗褐色土(10YR3/3)粘土質シルト 径5~10mm黄褐色土(地山粘土)ブロック状に10%含む 締まりあり 粘性あり



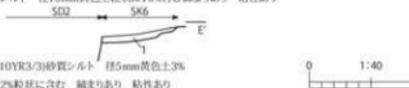
- SD2
- 1 褐色(10YR4/4)砂質シルト 径5mm赤色土10%・径10mm黄色土3%粒状・径50~100mm礫2%含む 締まりあり 粘性あり
  - 2 二色・黄褐色(10YR4/3)砂質シルト 径5mm赤色土7%・径2mm炭化物2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 3 暗褐色土(10YR3/4)砂質シルト 径5mm赤色土粒状に3%含む 締まりあり 粘性あり
  - 4 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト 径5mm黄色土3%・赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 5 暗褐色土(10YR3/4)砂質シルト 径5mm黄色土2%・赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 6 暗褐色土(10YR3/4)粘土質シルト 径10~50mm赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 7 褐色(10YR4/4)砂質シルト 径2mm赤色土2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 8 暗褐色土(10YR3/4)砂質シルト 径5mm黄色土2%・赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 9 暗褐色(10YR2/2)砂質シルト 径5mm黄色土2%・赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 10 暗褐色土(10YR3/4)粘土質シルト 径10~50mm赤色土15%粒状に含む 締まりあり 粘性あり



- SD2
- 1 褐色(10YR4/4)砂質シルト 径5mm黄色土10%・径10mm黄色土2%粒状・径50~100mm礫2%含む 締まりあり 粘性あり
  - 2 暗褐色(10YR3/2)砂質シルト 径10mm暗褐色土2%・径5~10mm黄色土2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 3 黒褐色土(10YR3/2)砂質シルト 径5mm赤色土2%・炭化物1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 4 黒褐色土(10YR3/1)シルト質粘土 径5mm黄色土・炭化物1%粒状に含む 締まりやや弱 粘性あり
  - 5 暗褐色土(10YR3/4)砂質シルト 径5mm黄色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性やや弱
  - 6 黒褐色土(10YR3/1)粘土質シルト 径50~100mm黄褐色土(地山粘土)ブロック状に50%・径20~50mm礫2%含む 締まりあり 粘性あり
  - 7 二色・黄褐色(10YR4/3)砂質シルト 径5~10mm赤色土7%・径5mm炭化物2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 8 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト 径5mm黄色土・炭化物2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 9 褐色(10YR4/4)砂質シルト 径5mm黄色土20%・径3mm炭化物1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 10 黒褐色土(10YR3/2)砂質シルト 径5mm赤色土2%・炭化物1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 11 黒褐色土(10YR3/1)シルト質粘土 径10mm黄色土粒状に20%・径50mm礫5%含む 締まりあり 粘性あり

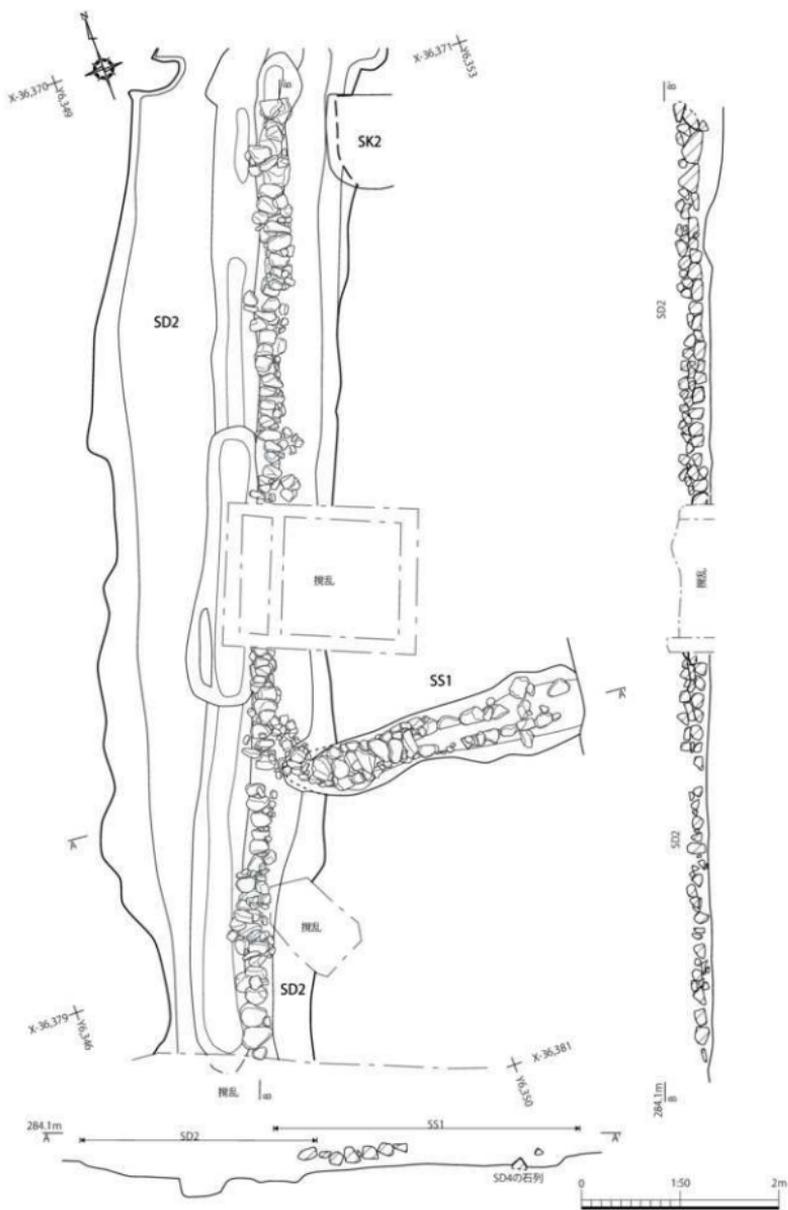


- SD2
- 1 褐色(10YR4/4)砂質シルト 径5mm黄色土10%・径10mm黄色土2%粒状・径50~100mm礫2%含む 締まりあり 粘性あり
  - 2 黒褐色土(10YR3/2)砂質シルト 径5mm赤色土2%・径50~100mm礫2%含む 締まりあり 粘性あり
  - 3 黒褐色土(10YR3/2)粘土質シルト 径2mm赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 4 黒褐色土(10YR3/1)シルト質粘土 径2mm炭化物1%粒状に含む 締まり弱 粘性あり
  - 5 黒褐色土(10YR3/2)粘土質シルト 径5mm黄色土10%・赤色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性やや弱
  - 6 二色・黄褐色(10YR4/3)砂質シルト 径5mm赤色土10%・赤色土7%・炭化物2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 7 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト 径5mm黄色土20%・炭化物2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 8 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト 径10mm黄色土5%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 9 褐色(10YR4/4)砂質シルト 径5mm黄色土20%・径3mm炭化物1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 10 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト 径5mm赤色土7%・径3mm炭化物1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
  - 11 暗褐色(10YR4/4)粘土質シルト 径10mm黄色土粒状に10%含む 締まりあり 粘性あり



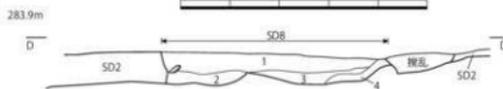
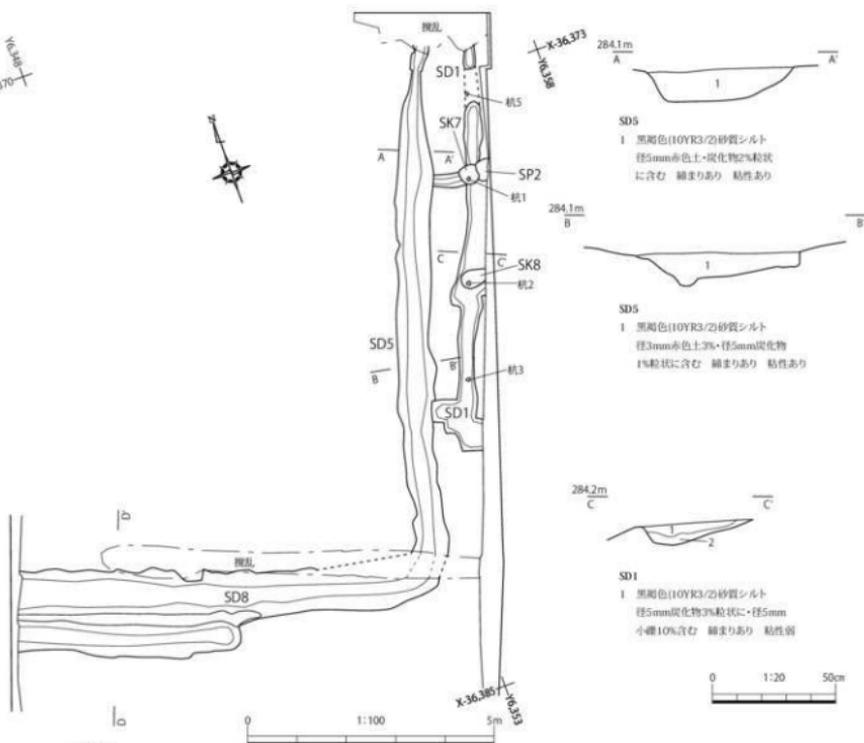
- SK6
- 1 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト 径5mm黄色土3%  
炭化物2%粒状に含む 締まりあり 粘性あり

第7図 遺構 (SD2・SK6)



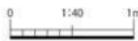
第8図 遺構(SD2)

X-36,370  
Y-36,370

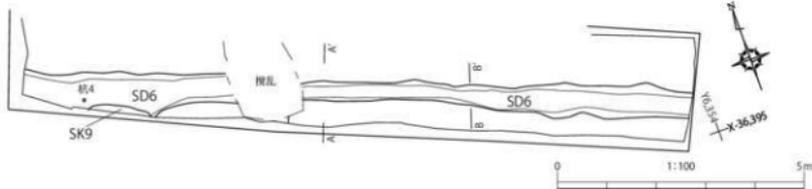


SD8

- 1 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト 径2mm赤色土5%・径5mm炭化物1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
- 2 黒灰色(10YR4/1)砂質シルト 径5mm黄色土5%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
- 3 黒褐色(10YR3/3)粘土質シルト 径10mm赤色土1%・径5mm炭化物10%粒状に含む 締まりあり 粘性あり
- 4 黒褐色土(10YR3/2)砂質シルト 径50mm黄色土(焼土)10%ブロック状に含む 締まりあり 粘性あり

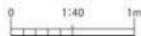


X-36,390  
Y-36,390

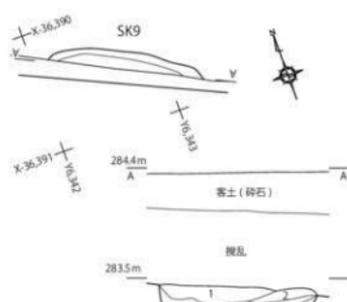
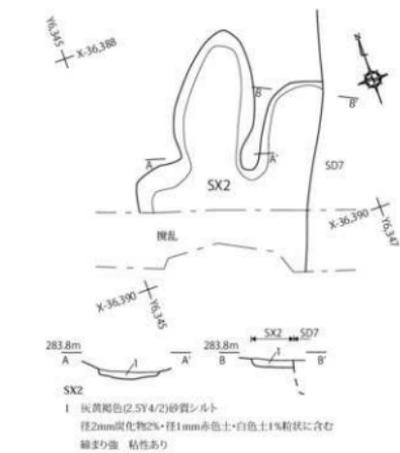


SD6

- 1 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト 径2mm赤色土2%・径1mm黄色土1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり

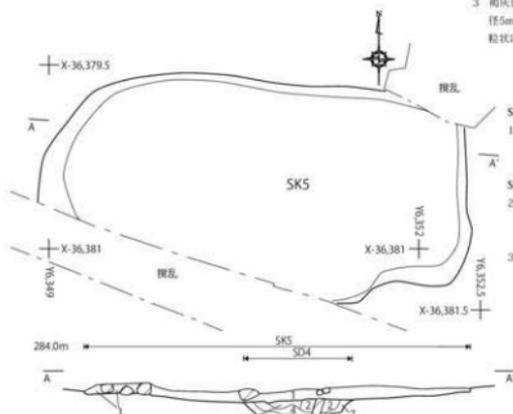


第9図 遺構 (SD5・SD8・SD1・SD6)



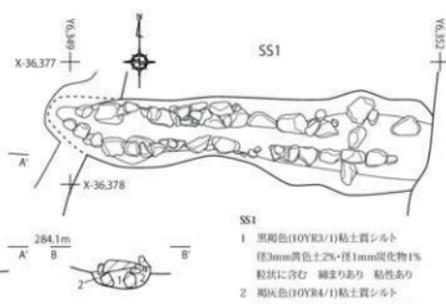
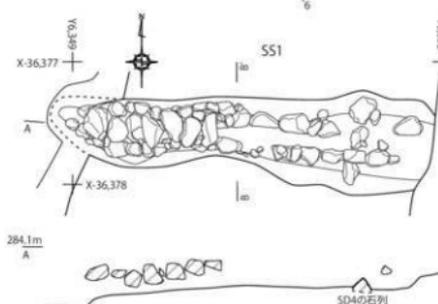
**SK9**

- |  |   |
|--|---|
| 1 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト<br>径10mm炭化物2%・赤色土1%粒状に含む<br>締まりあり 粘性あり              | 4 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト<br>径10mm黄色土3%・赤色土1%<br>粒状に含む 締まり強 粘性あり |
| 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト<br>径20mm黄色土20%ブロッケ状・径5mm<br>炭化物1%粒状に含む 締まり強 粘性あり | 5 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト<br>径5mm黄色土3%粒状に含む<br>締まり強 粘性あり          |
| 3 暗灰色(10YR4/1)粘土質シルト<br>径5mm黄色土7%・径10mm炭化物1%<br>粒状に含む 締まり強 粘性あり          | 6 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト<br>径10mm黄色土5%粒状に含む<br>締まり強 粘性あり        |



**SK5**

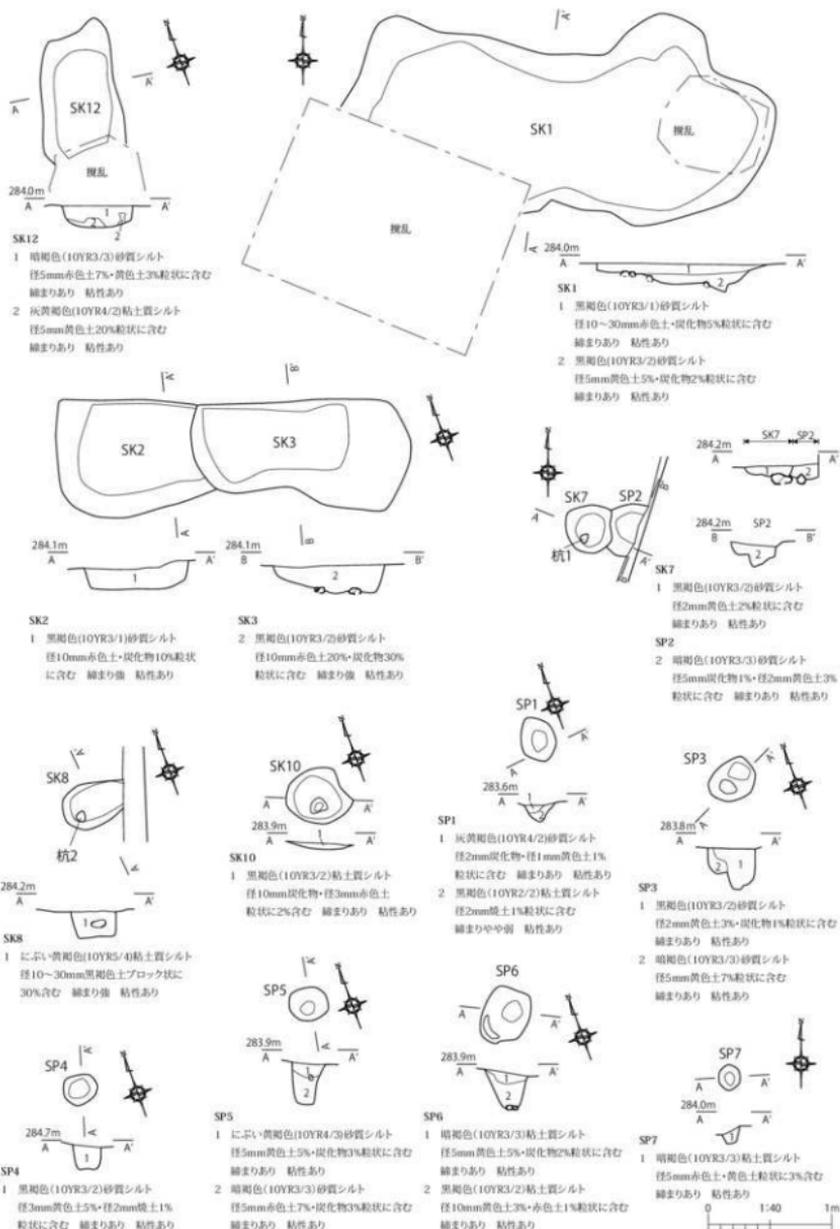
- |  |  |
|--|--|
| 1 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト<br>径10~50mm焼土塊5%・ワラ状<br>炭化物を含む 締まりあり 粘性あり  | 4 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト<br>径0.5mm砂20%・径5mm赤色土7%<br>粒状に含む 締まりあり 粘性弱   |
| 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト<br>径5mm黄色土2%・赤色土1%粒状<br>に含む 締まりあり 粘性やや弱 | 5 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト<br>径5~10mm黄色土10%粒状に含む<br>締まりあり 粘性あり          |
| 3 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト<br>径5mm黄色土7%粒状に含む<br>締まりあり 粘性あり            | 6 黒色(10YR2/1)砂礫<br>径0.5mm砂90%・径10mm礫20%含む<br>締まりあり 粘性なし          |
|  | 7 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト<br>径10mm黄色土20%・径5mm炭化物<br>1%粒状に含む 締まりあり 粘性あり |



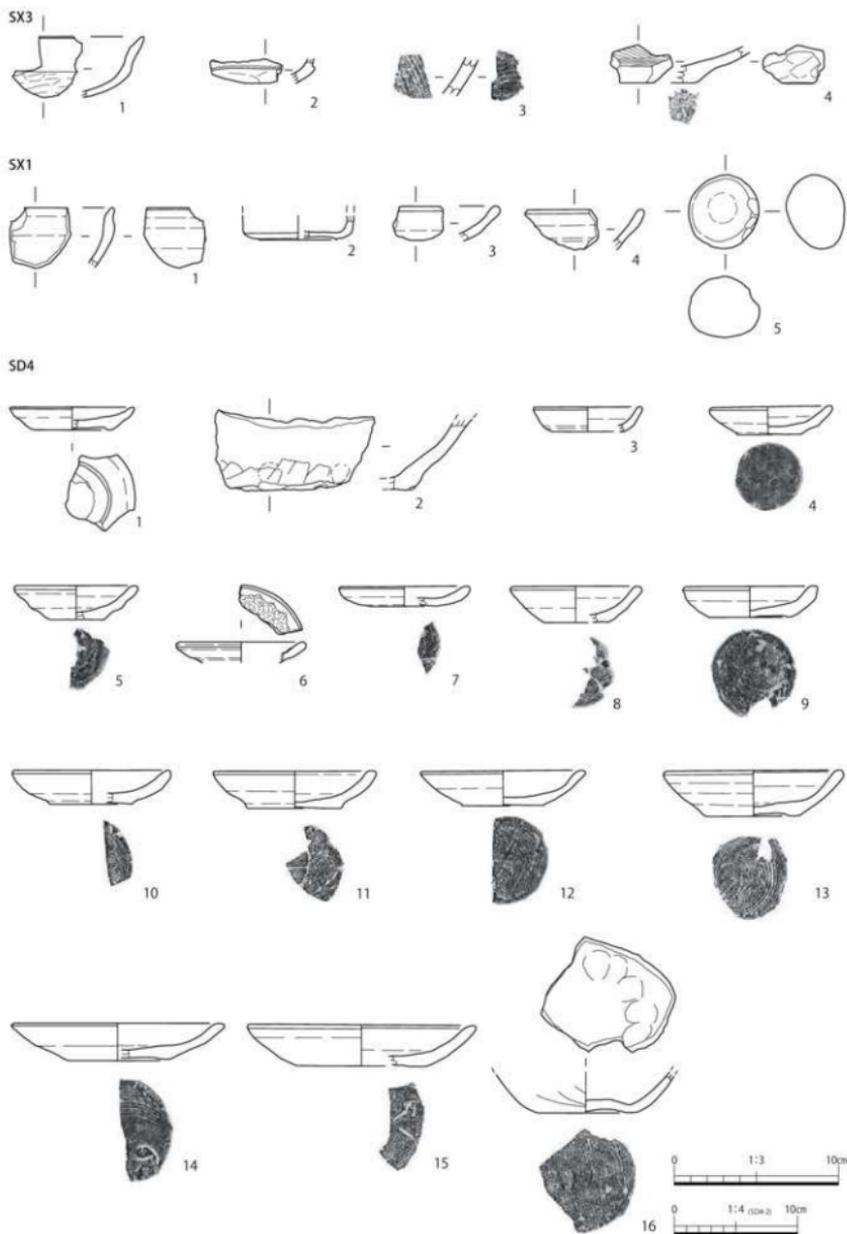
**SS1**

- |   |   |
|---|---|
| 1 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト<br>径3mm黄色土2%・径1mm炭化物1%<br>粒状に含む 締まりあり 粘性あり | 2 暗灰色(10YR4/1)粘土質シルト<br>径5mm黄色土7%・径3mm炭化物2%<br>粒状に含む 締まりあり 粘性あり |
|---|---|

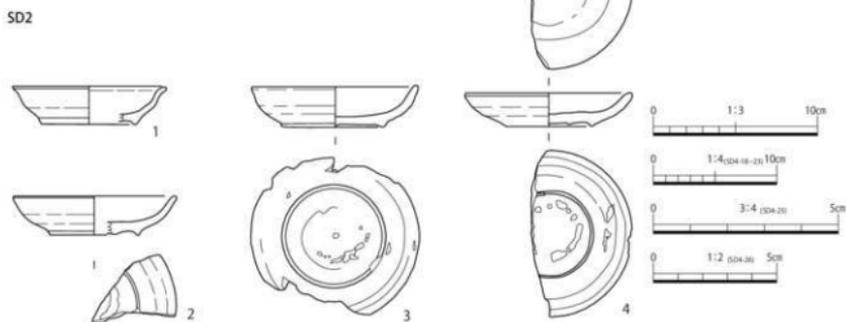
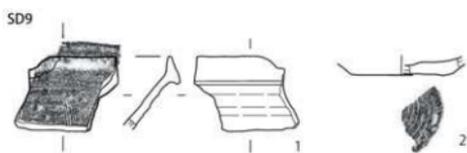
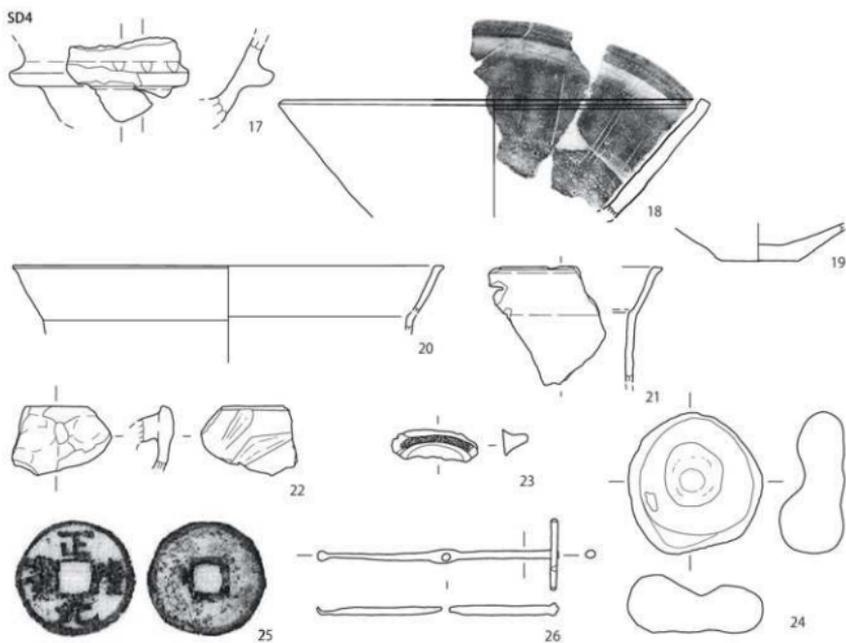
第10図 遺構 (SX2・SK9・SK5・SS1)



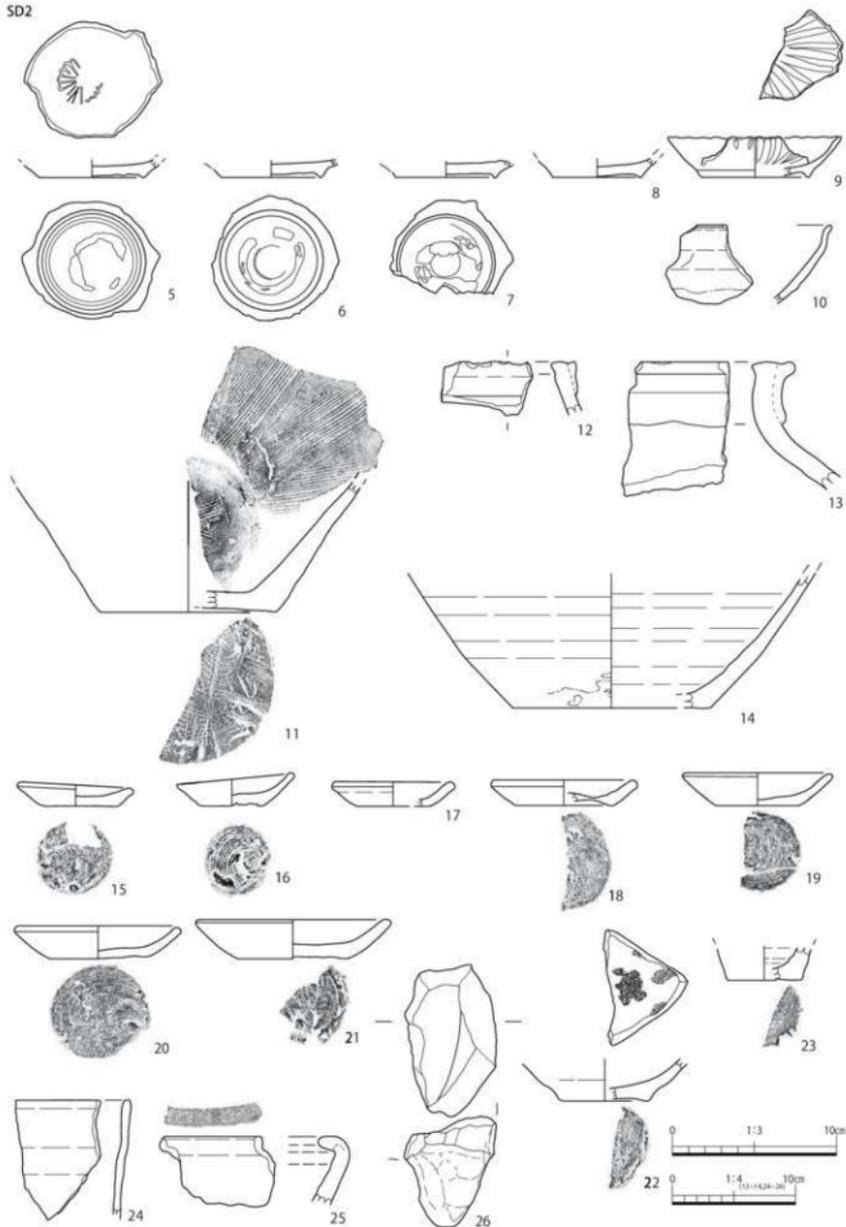
第11図 遺構(SK12-SK1~3-SK7-SK8-SK10-SP1~7)



第12図 遺物 (SX3・SX1・SD4)

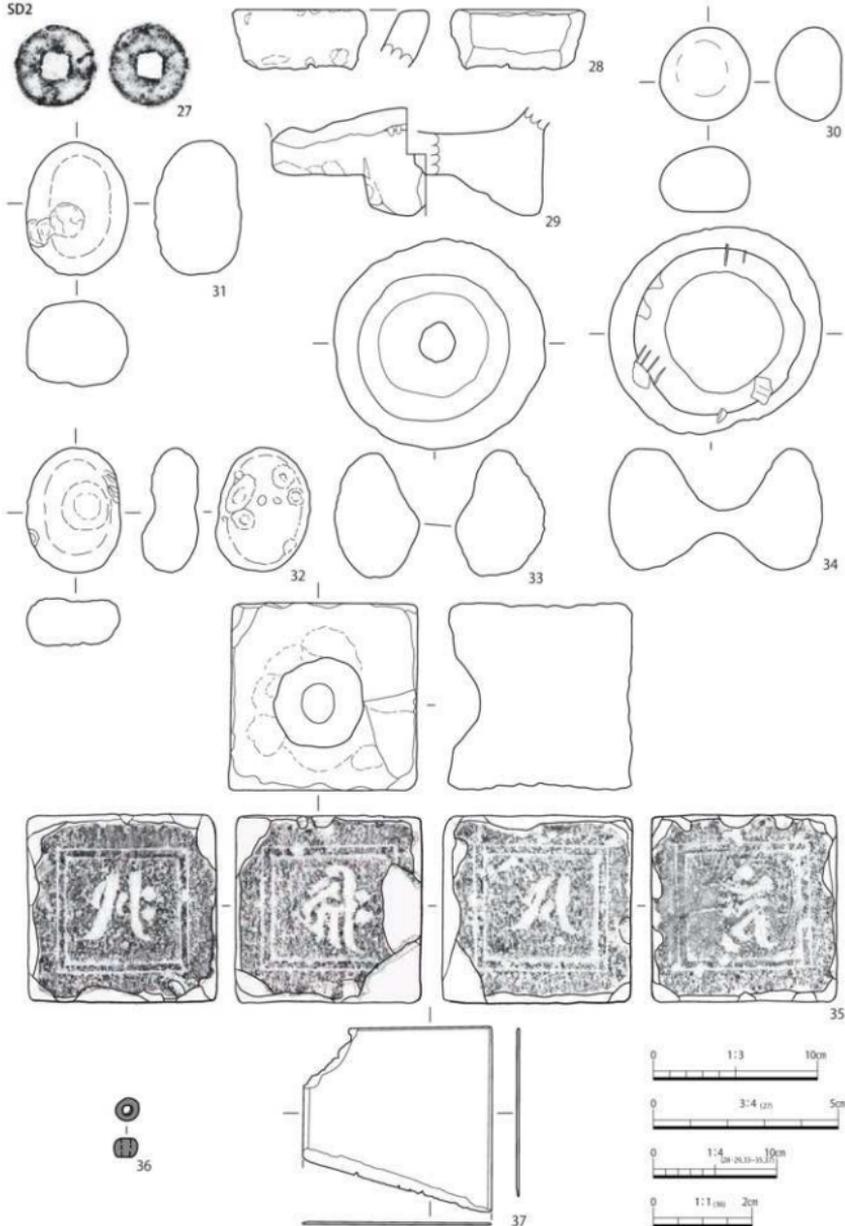


第13図 遺物 (SD4・SD9・SD2)

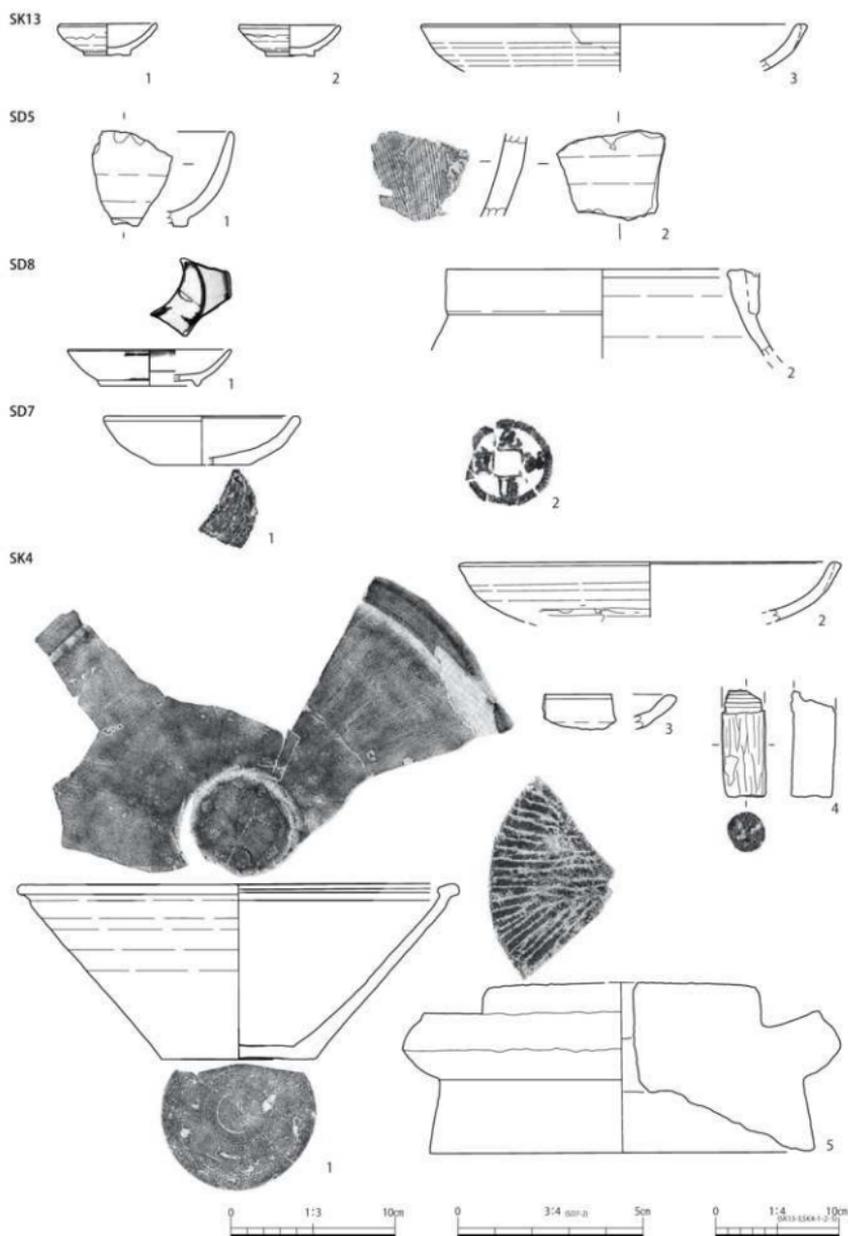


第14図 遺物(SD2)

SD2

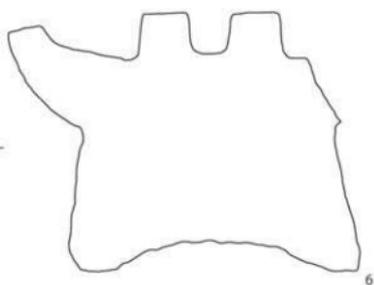
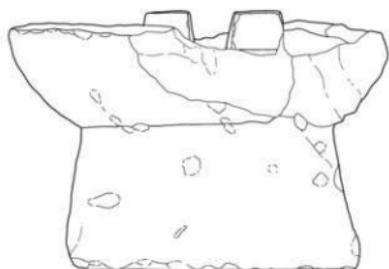
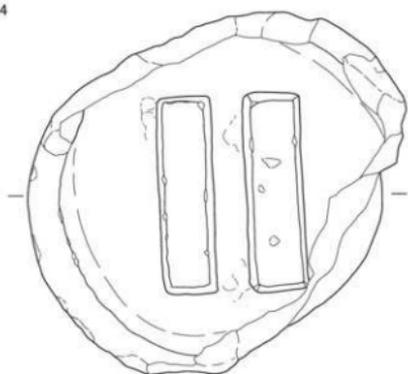


第15図 遺物(SD2)

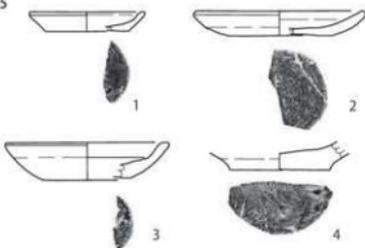


第16図 遺物 (SK13・SD5・SD8・SD7・SK4)

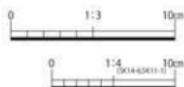
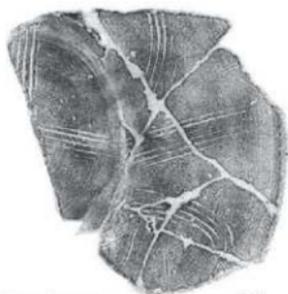
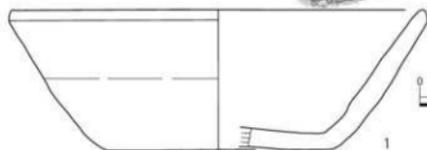
SK4



SK5



SK11

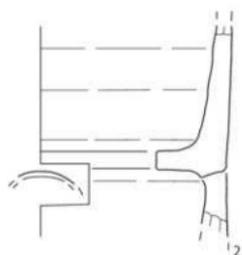
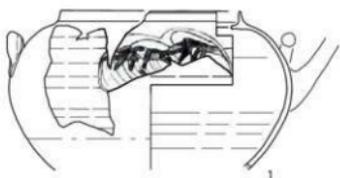


第17図 遺物 (SK4・SK5・SK11)

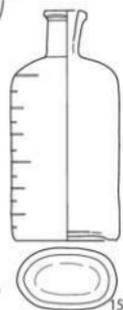
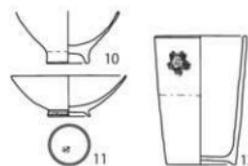
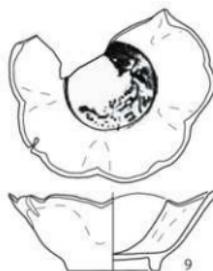
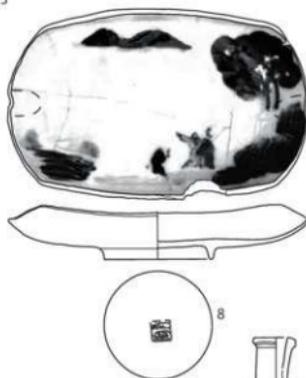
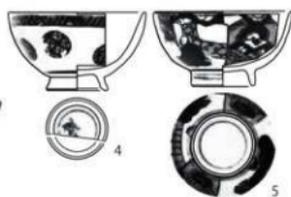
SS1



SD6

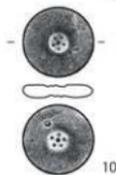
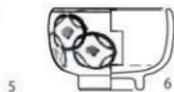
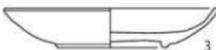
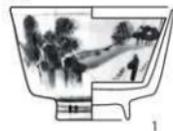


SK1

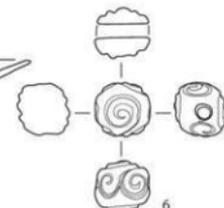
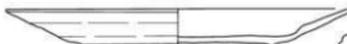
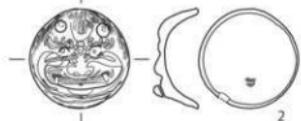
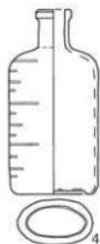
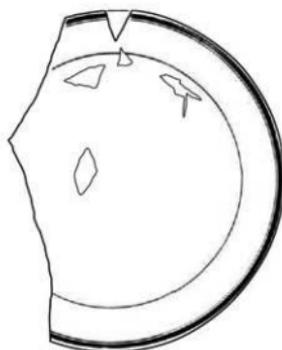


第18図 遺物 (SS1・SD6・SK1)

SK2



SK3



0 1:3 10cm

0 3:4 (SK3) 5cm

第19図 遺物 (SK2・SK3)



第20図 遺物 (SD1・遺構外)



遺物類表(陶磁器・土器・瓦・土製品、ガラス製品)

発掘番号	発掘回数	遺物	種別	数量	(重量単位: g)				形状	用途(用途: C) 内容	部位	成造方法・施装・装飾・製作・製作年代	出土内容物	備考
					A	B	C	D						
20	14	9	502	土器	カワラタ	96	6.0	2.4	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
21	14	9	502	土器	黒土台	111.6	15.8	2.4	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
22	14	9	502	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
23	14	9	502	土器	黒土台	54.0	6.2	1.3	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
24	14	9	502	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
25	14	9	502	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
26	14	9	502	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	16	10	503	土器	カワラタ	6.0	2.8	1.9	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	16	10	503	土器	カワラタ	6.0	2.8	1.9	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
3	16	10	503	土器	カワラタ	13.0	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	16	10	505	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	16	10	506	土器	カワラタ	19.0	6.0	2.2	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	16	10	507	土器	カワラタ	13.0	6.0	3.0	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	16	11	504	土器	カワラタ	13.0	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	16	11	504	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
3	16	11	504	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
4	16	11	504	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	17	11	505	土器	カワラタ	16.0	6.0	1.5	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	17	11	505	土器	カワラタ	16.0	6.0	1.5	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
3	17	11	505	土器	カワラタ	19.0	6.3	2.3	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
4	17	11	505	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	17	11	5011	土器	カワラタ	25.2	11.0	4.6	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	18	11	551	土器	カワラタ	13.2	6.4	3.3	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	18	11	506	土器	カワラタ	10.0	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	18	11	506	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	18	12	501	土器	カワラタ	9.8	4.2	6.7	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	18	12	501	土器	カワラタ	11.0	5.1	5.7	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
3	18	12	501	土器	カワラタ	11.0	5.1	5.7	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
4	18	12	501	土器	カワラタ	6.4	3.6	4.8	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
5	18	12	501	土器	カワラタ	8.3	4.8	4.6	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
6	18	12	501	土器	カワラタ	12.6	7.2	2.3	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
7	18	12	501	土器	カワラタ	11.5	6.4	6.6	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
8	18	12	501	土器	カワラタ	18.1	6.6	3.3	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
9	18	12	501	土器	カワラタ	12.4	5.6	4.8	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
10	18	12	501	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
11	18	12	501	土器	カワラタ	—	—	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
12	18	12	501	土器	カワラタ	7.0	3.4	2.5	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
13	18	12	501	土器	カワラタ	6.2	3.2	—	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
14	18	12	501	土器	カワラタ	1.8	1.0	1.6	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
15	18	12	501	土器	カワラタ	3.5	2.4	7.5	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
16	18	12	501	土器	カワラタ	2.5	1.8	1.4	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
1	19	12	502	土器	カワラタ	9.8	4.3	6.9	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
2	19	12	502	土器	カワラタ	13.0	7.0	11.8	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
3	19	12	502	土器	カワラタ	12.8	6.7	2.4	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
4	19	12	502	土器	カワラタ	10.0	5.0	3.1	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
5	19	12	502	土器	カワラタ	4.0	2.0	3.5	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
6	19	12	502	土器	カワラタ	6.7	3.0	3.0	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
7	19	12	502	土器	カワラタ	10.0	5.0	4.2	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		
8	19	12	502	土器	カワラタ	1.2	0.5	1.5	—	コラロ成造	成造方法不明	土器		

通物総表(陶磁器・土器・瓦・土製品、ガラス製品)

報告書 番号	発行 年度	通物 品名	形状	用途	形状	質量(g/m <sup>2</sup> )				部位	検査方法	製造年代	備考	
						A	B	C	D					
10	19	12	5x2	磁器	おはしき	4.3	4.3	0.8	—	底面	—	—	—	
1	19	13	5x3	磁器	小鉢	18.0	10.5	3.5	—	2.1mm 3/4～底面	—	—	底面以外の部分に黒色 青磁土で内面に黒色、緑玉、赤(紅)磁土 黒色(TEAGLE, S～NO, ...)	
2	19	13	5x3	磁器	小鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	
3	19	13	5x3	磁器	茶碗	(21.0)	(11.6)	2.2	—	2.1mm 1/2～底面 1/2	—	—	底面	
4	19	13	5x3	ガラス製品	水皿	20	46×2.8	11.3	—	—	—	—	2.1mm 底式、黒色透明	
5	19	13	5x3	ガラス製品	花瓶	1.6	2.6	5.9	—	口縁部	—	—	2.1mm 底式、黒色透明	
6	19	13	5x3	土製品	土玉	1.5	1.5	1.5	—	底面	—	—	底面4mmの厚みあり、黒色透明	
1	20	13	5x1	磁器	水皿	(13.0)	—	<0.06	—	2.1mm～底面	—	—	底面以外の部分に、口縁	
2	20	13	5x1	磁器	小鉢	(9.0)	(3.2)	4.2	—	2.1mm～底面	—	—	底面以外の部分に、口縁	
3	20	13	5x1	磁器	水皿	1.9	3.5	—	—	2.1mm 1/2～底面	—	—	底面以外の部分に、口縁	
4	20	13	5x1	磁器	水皿	4.6	—	—	—	2.1mm 1/2～底面	—	—	底面以外の部分に、口縁	
5	20	13	5x1	磁器	小鉢(器)	4.8	1.8	2.9	—	口縁部	—	—	底面以外の部分に、口縁	
6	20	13	5x1	磁器	茶碗	—	—	—	—	底面～底面 3/4	—	—	底面以外の部分に、口縁	
7	20	13	5x1	磁器	茶碗	11.40	0.6	5.8	—	2.1mm 1/5～底面 1/2	—	—	底面以外の部分に、口縁	
8	20	13	5x1	磁器	茶碗	11.40	0.6	6.6	—	2.1mm 1/4～底面 1/5	—	—	底面以外の部分に、口縁	
9	20	13	5x1	磁器	茶碗	—	—	<0.25>	—	口縁部～底面	—	—	底面以外の部分に、口縁	
10	20	13	5x1	磁器	茶碗	(6.0)	—	<1.2>	—	底面 1/4～底面小	—	—	底面以外の部分に、口縁	
11	20	13	5x1	磁器	茶碗	4.7	—	1.3	—	底面	—	—	底面以外の部分に、口縁	
12	20	13	5x1	磁器	茶碗	4.3	4.7	4.6	—	底面	—	—	底面以外の部分に、口縁	
13	20	13	5x1	磁器	茶碗	—	—	<1.6>	<21.0>	底面 1/2	—	—	底面以外の部分に、口縁	
14	20	13	5x1	磁器	土製品	磁器	(26.0)	(24.0)	7.3	—	2.1mm小～底面小	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
15	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	1.0	3.1	5.8	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
16	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	1.2	2.9	3.4	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
17	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	1.4	3.3	8.5	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
18	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	1.2	2.4	7.4	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
19	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	1.6	3.0	6.8	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
20	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	1.5	3.2	7.1	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
21	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	—	—	<4.2>	—	底面～底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
22	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	1.9	—	0.6	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
23	20	13	5x1	磁器	ガラス製品	花瓶	2.9	1.0	0.2	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
24	20	13	5x1	磁器	土製品	磁器	2.0	2.0	0.6	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
25	20	13	5x1	磁器	土製品	磁器	1.9	2.1	0.4	—	口縁部	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
26	20	13	5x1	磁器	土製品	磁器	1.2	1.3	1.1	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄

通物総表(石製品)

報告書 番号	発行 年度	通物 品名	形状	用途	形状	質量(g/m <sup>2</sup> )				備考			
						A	B	C	D				
5	12	7	5x1	磁器	花瓶	4.1	4.3	3.6	—	ガラス	—	—	
24	13	8	5x4	磁器	花瓶	8.2	8.2	4.0	—	底面、口縁部	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
28	15	9	5x2	磁器	花瓶	—	—	<4.6>	<10.0>	底面、口縁部	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
29	15	9	5x2	磁器	花瓶	5.7	5.5	4.0	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
31	15	9	5x2	磁器	花瓶	8.2	8.2	5.3	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
32	15	9	5x2	磁器	花瓶	7.6	5.8	3.3	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
34	15	10	5x2	磁器	花瓶	17.3	17.0	10.4	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
34	15	10	5x2	磁器	花瓶	16.9	17.2	9.9	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
35	15	10	5x2	磁器	花瓶	15.3	15.0	15.4	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
36	15	10	5x2	磁器	花瓶	0.05	0.45	0.4	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄

通物総表(石製品)

報告書 番号	発行 年度	通物 品名	形状	用途	形状	質量(g/m <sup>2</sup> )				備考			
						A	B	C	D				
37	15	10	5x2	磁器	花瓶	41.3	15.3	0.2	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
5	16	11	5x4	磁器	花瓶	22.3	11.2	13.9	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
6	17	11	5x4	磁器	花瓶	20.5	20.8	21.2	—	底面	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄

通物総表(鉄鋼・金属製品)

報告書 番号	発行 年度	通物 品名	形状	用途	形状	質量(g/m <sup>2</sup> )				備考		
						A	B	C	D			
25	13	8	5x4	磁器	花瓶	2.4	2.6	0.7	0.1	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
26	13	8	5x4	磁器	花瓶	9.8	2.9	0.3	—	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
27	15	9	5x2	磁器	花瓶	2.2	3.5	0.7	0.1	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄
2	16	10	5x2	磁器	花瓶	2.4	0.7	0.1	—	—	—	底面、口縁部(器) 赤黄

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 甲府城下町遺跡(武田1丁目44-1)出土の動物遺体

櫻庭陸央<sup>1)</sup>・山本満梨奈<sup>1)</sup>・植月学<sup>2)</sup>

1) 公益財団法人 山梨文化財研究所

2) 帝京大学文化財研究所

#### 1. はじめに

本稿では、甲府城下町遺跡(武田1丁目44-1)発掘調査において出土した動物遺体について報告する。本資料は基本的に溝からの出土であり、時期は中世末～近世初頭に属する。

#### 2. 方法

同定に際しては部位の明らかな標本を抽出した。同定は基本的に現生標本との比較によりおこない、同定可能な全部位を対象とした。四肢骨は骨端、およびその付近を残す標本はすべて対象とし、骨幹部破片も可能なかぎり対象とした。破片資料についても可能なかぎり対象とした。ただし、全周していない破片については組成等算出の際には検討に含めなかった。なお、いずれも計点数を定め、集計の際に重複することのないよう留意した。計測は基本的に Driesch(1976)にしたがい、計測可能な部位をデジタルノギスを用いて適宜計測し、一覧表に記載した。その他、同定の際には、哺乳類の四肢骨骨端部の癒合状況や、解体痕や被熱等も観察し、一覧表に記載した。

#### 3. 結果

同定結果の一覧を表1に、種名を表2に示した。いずれも哺乳類であり、同定標本数(NISP)でニホンジカ5点、イノシシ3点、イヌ2点、イルカ類1点、ウマ1点、イノシシ属?1点の合計12点であった。最小個体数(MNI)はそれぞれ1である。特記すべき点として、まずは数多くある本遺跡の調査のなかでもこれまでみられなかったイノシシおよびイルカ類が新たに確認された。また、主体種であったニホンジカでは上

表1 出土動物遺体一覧

イタノ%	イタノNo./種別	遺体名	遺体記号	遺体番号	表記	年/月/日	種	部位	位置	左右	癒合(記)	癒合(測)	数	備考
1	1	2号溝	SD0	12	SD2-12	2022/9/7	イノシシ	上脛骨	[M引]	右	-	-	1	
1	2	2号溝	SD2	12	SD2-12	2022/9/7	イノシシ	上/下脛骨	破片	?	-	-	+	
2	-	2号溝	SD2	38	SD2-38	2022/9/15	不可	-	破片	-	-	-	+	
3	1	2号溝	SD2	40	SD2-40	2022/9/22	ニホンジカ	腓骨	角帯・角	?	-	-	1	落肉
3	2	2号溝	SD2	40	SD2-40	2022/9/22	ニホンジカ	角	破片	?	-	-	+	
4	-	3号溝	SD3	10	SD3-10	2022/9/12	不可	-	破片	-	-	-	+	
5	-	3号溝	SD3	52	SD3-52	2022/9/15	不可	-	破片	-	-	-	+	脛骨
6	-	3号溝	SD3	54	SD3-54	2022/9/15	ウマ	腕骨	abcde	-	c	c	1	
7	-	3号溝	SD3	56	SD3-56	2022/9/15	イルカ類	脛骨	-	-	c	c	1	
8	-	3号溝	SD3	58	SD3-58	2022/9/16	不可	-	破片	-	-	-	+	
9	-	3号溝	SD3	92	SD3-92	2022/9/27	イノシシ	上脛骨	a	左	c	x	1	
10	-	3号溝	SD3	98	SD3-98	2022/9/28	ニホンジカ	上脛骨	de	右	x	c	1	切断(遠位端部分)
11	1	4号溝	SD4	15	SD4-15	2022/9/7	ニホンジカ	大腿骨	de	左	x	c	1	
11	2	4号溝	SD4	15	SD4-15	2022/9/7	不可	-	破片	-	-	-	+	
12	-	4号溝	SD4	21	SD4-21	2022/9/12	ニホンジカ	中手骨	abc	右	c	x	1	Bp=24.4
13	-	4号溝	SD4	28	SD4-28	2022/9/13	不可	-	-	-	-	-	+	
14	-	4号溝	SD4	41	SD4-41	2022/9/13	不可	-	破片	-	-	-	+	
15	1	8号溝	SD8	3	SD8-3	2022/9/15	イノシシ	上脛骨	de	左	x	c	1	
15	2	8号溝	SD8	3	SD8-3	2022/9/15	不可	-	-	-	-	-	+	
16	1	9号溝	SD9	-	SD9-併	2022/6/6	ニホンジカ	中手骨	de	-	x	c	1	切断(脛骨部分)
16	2	9号溝	SD9	-	SD9-併	2022/6/6	不可	-	-	-	-	-	+	
17	1	9号溝	SD9	3	SD9-3	2022/6/7	イヌ	脛骨	ab	左	d	x	1	
17	2	9号溝	SD9	3	SD9-3	2022/6/7	イヌ	脛骨	de	左	x	c	1	
18	-	9号溝	SD9	4	SD9-4	2022/6/7	イノシシ属?	上脛骨	ef	右	x	x	1	
19	-	4号溝	SD4	-	SD4-併	2022/6/8	不可	-	-	-	-	-	+	

四肢骨位置: a:近位端, b:近位部, c:中間, d:遠位部, e:遠位端 癒合: c:完了, d:未癒合骨幹, A:破断

腕骨遠位端と中手骨遠位端に切断痕が認められた。切断面は平坦面を形成し、鋭い金属器による何らかの加工があったと推定される。落角を持ち込んでいる点も角加工の素材の可能性があり、注目される。

表2 種名一覧

哺乳類	MAMMALIA
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
マイルカ上科	Delphinoidea
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ウマ	<i>Equus caballus</i>

#### 4. 考察

以下では、本稿での同定結果を含め、既報告の集成結果(表3)と比較しつつ甲府城下町における動物資源利用について考察を試みる。本遺跡では中世～幕末という時期幅の中で、武家屋敷地および町人地の性格の異なる2つの領域が存在する。また、甲府城の南北で異なった獣骨組成を示す点も過去の報告で指摘している(甲府市教育委員会2015)。以下では、地点の位置や性格、時期等を考慮しながら、各様相の把握を試みたい。

特に、今回の資料は甲府城北側の町人地における中世末～近世初頭に属する資料である。北側のこれまでの資料は中世と近世中期～後期の資料であり、武家屋敷地に限られていた。したがって、まず、本資料によって北側における空白の時期を埋めることが可能であり、中世～近世の推移の把握が可能となった。他地点では中世の資料は得られておらず、北側は中近世における動物資源利用の様相を把握するうえで重要である。加えて、本資料はこれまで得られなかった町人地の資料である。よって、北側における武家屋敷地と町人地の比較も新たに可能となった。

##### ①比較結果の概要<sup>(1)</sup>

図1には、動物遺体の種組成について、地点別に比較した結果を示した。まず、北側の武家屋敷地では中世～近世初頭まで哺乳類が卓越するが、近世中期以降は貝類が主体となる。北側の町人地(本報告資料)では、先述のように哺乳類で構成されていた。

これに対し、南側の武家屋敷地では近世中期～後期において魚類が主体となるが、近世～近代では哺乳類の比率が高くなる。同じく南側の町人地では近世中期～後期で鳥類(ニワトリ)が多いものの、基本的に貝類主体であるといえる。おおまかに、貝類の比率が目立つ南側の町人地と脊椎動物が目立つ南北・武家屋敷地という差異が指摘できる。南北の武家屋敷地で比較すると、少なくとも同時期の近世中期～後期では北側で貝類、南側で魚類主体という差異も看取される。

図2には、貝類組成の比較結果について示した。南側の武家屋敷地では出土量が少なかったため、検討から除外した。北側の武家屋敷地では近世中期～後期の資料があり、ヤマトシジミ主体でサザエがこれに次ぐ。南側の町人地ではアワビ類が各時期とも一定量出土している。他には、近世の段階ではハマグリが、近世後期～幕末ではシジミ類・ヤマトシジミの出土比率が高い。少なくとも近世中期～後期では北側の武家屋敷地でヤマトシジミ、南の町人地ではサザエ・アワビ類・ハマグリという主体種の地点別差異が確認された。

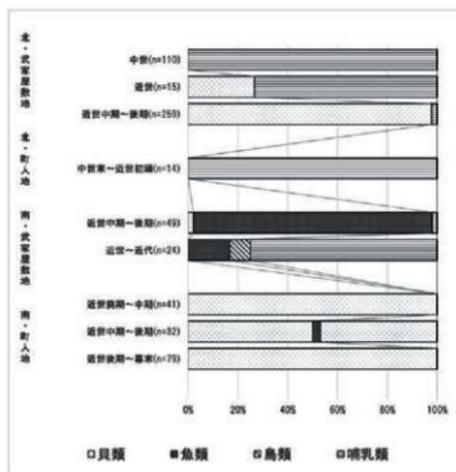


図1

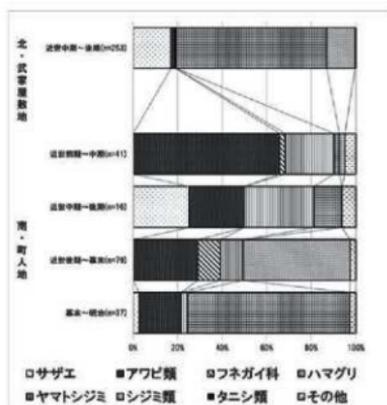


図2

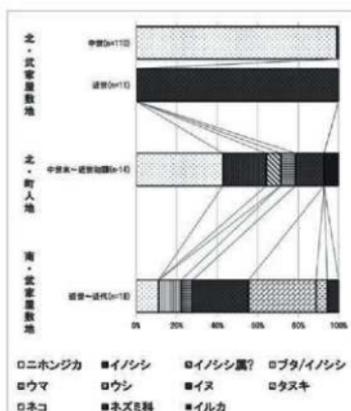


図3

図3には、哺乳類組成比較について示した。北側の武家屋敷地では中世および近世の資料が得られており、前者はニホンジカ、後者はイヌが多量に出土している。北・町人地（本報告資料）はニホンジカが主体種で、イノシシがこれに次ぐ。出土量が少ないが、南側の武家屋敷地についてみると、基本的にイヌやタヌキ、ネコといった小型獣の比率が高く、大型哺乳類の出土比率が低い。

以上の傾向をまとめると、以下の点を指摘できる。

- ①北側武家屋敷地では大型哺乳類主体から、近世中期を境に貝類（ヤマトシジミ）主体へ変化する。
- ②北側町人地（中世末～近世初頭）では哺乳類で構成され、大型哺乳類の比率が高い。
- ③南側武家屋敷地では魚類、または小型哺乳類主体。
- ④南側町人地では基本的に貝類主体でアワビを一定量含むが、近世後期を境にもう一つの主体種がハマグリからシジミ類へと変化する。

## ②地点別の比較

上記の結果をふまえて、以下では地点別の性格を考慮した比較を試みる。まず、武家屋敷地と町人地についてみていく。北側という視点でみると、少なくとも中世を中心とした段階では双方哺乳類が主体となるという点で共通する。南では近世に限られるが、武家屋敷地では脊椎動物（魚類・哺乳類）、町人地では貝類主体という差異が確認できる。北・町人地では貝類は確認されなかったが、特に南側の町人地の比率は近世を通じて圧倒的に高い。北側では武家屋敷地の近世中期～後期で貝類が多量に出土しているが、比較してみると、北・武家屋敷地ではヤマトシジミ主体、南・町人地ではサザエ・アワビ類・ハマグリとなっている。

次に、南北の武家屋敷地についてみていく。武家屋敷地の南北では、まず魚類の出土比率が異なり、南側では比較的多量に出土している。図示していないものの、組成でみると、マイワシ、タイ科、ボラ科、アジ類などが主体となる（表3を参照）。また、北側では大型哺乳類（ニホンジカ主体）が豊富にみられるのに対し、南側では小型獣が主体であった。

## 5. おわりに

今回の出土資料は哺乳類を中心としたものであったが、イノシシやイルカ類はこれまで出土していなかったことが集成を通じて確認された。この点は甲府城下町遺跡における動物資源利用の多様性の一端を示した。加えて、南側ではほとんどみられない大型哺乳類が北側の武家屋敷地では豊富に出土するという傾向は既に

指摘している(甲府市教育委員会 2015)、今回もこれと整合的であった。やはり獣骨に関する何らかの空間的規制を想起させるものであった。切断痕のあるシカ骨や落角の持ち込みなどからは工房的な空間の存在も考えられる。本地点は「細工町」としてかつて職人集団が存在していたと推定され、骨加工をおこなう空間が展開していた可能性も想定できる。今後は武家屋敷地間、あるいは武家屋敷地と町人地間の階層差やそれに伴う土地利用の時期的変遷を含めたより詳細な検討を踏まえた動物資源利用の考察を進めていく必要がある。

(註)

(1) 今回の検討で図示した結果は、基本的に同定標本数(NISP)による。また、母数が10点以下の場合は図時しなかった。

参考文献

- ・ Driesch, Angela Von Den. 1976 A Guide to The Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin No.1. Cambridge, Mass.: Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- ・ 甲府市教育委員会 2007『甲府城下町Ⅳ-集会所建設工事に伴う発掘調査報告書-』(甲府市 39集)  
2013『甲府城下町遺跡Ⅸ-庁舎建設に伴う発掘調査報告書-』(甲府市 64集)  
2015『甲府城下町遺跡ⅩⅥ-甲府駅周辺土地区画整理事業(41/42街区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』(甲府市 79集)  
2016『甲府市内遺跡Ⅻ-平成25-26年度試掘調査報告書-』(甲府市 81集)
- ・ 財団法人山梨文化財研究所 2011『甲府城下町遺跡(丸の内二丁目109地点)-立体駐車場建設に伴う発掘調査報告書』
- ・ 山梨県埋蔵文化財センター 2004a『甲府城下町遺跡(日向町遺跡第2地点)-山梨県北口駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(山梨県 220集)  
2004b『甲府城下町遺跡-甲府駅周辺土地区画整理事業地内43街区埋蔵文化財発掘調査報告書』(山梨県 215集)  
2008『甲府城下町(北口県有地)-北口県有地開発に伴う発掘調査報告書』(山梨県 258集)  
2013『甲府城下町遺跡-甲府法務総合庁舎建設事業に伴う発掘調査報告書-』(山梨県 292集)  
2016『甲府城下町遺跡(旧柳町一丁目地点)-(都)古府中環状浅原橋線改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』



表3 甲府城下町遺跡出土動物遺体比較

位置	性格	遺構	時期	貝類	魚類	両生類・爬虫類	鳥類	哺乳類	文献
遺	武蔵原遺跡	1号溝	近世～近代	-	-	-	ニワトリ1点	イヌ2点、ネズミ1点	甲府市教育委員会(2013)
		1号井戸	近世～近代	-	-	-	-	イヌ1点	
		1号溝	近世～近代	-	-	-	-	ニホンジカの骨	
		溝11号基礎	近世～近代	-	アザガイ1点、タイ科1点	-	-	-	
		溝12号基礎	近世～近代	-	スズメ1点	-	-	-	
		E11グラウンド	近世～近代	-	-	-	-	-	
		E12グラウンド	近世～近代	-	-	-	-	ウサギ1点	
		G11グラウンド	近世～近代	-	-	-	-	アライグマ1点、ニホンジカ1点、タヌキ1点	
		H10グラウンド	近世～近代	-	タイ科1点	-	-	-	
		H14グラウンド	近世～近代	-	-	-	-	アライグマ1点	
		I08グラウンド	近世～近代	-	-	-	-	イヌ2点	
I11グラウンド	近世～近代	-	-	-	-	ネコ1点			
		遺構外	中世～江戸時代前期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
遺	野人堀	水堀遺跡01	江戸時代中期	ハマグリ2点、シジミ類2点、アライグマ1点	マガロ蟹1点	-	-	-	山形県歴史文化財センター(2016)
		遺構外	江戸時代中期	アライグマ10点、ハマグリ4点、ツメボイ科1点、シジミ類1点	-	-	-	-	
		遺跡中01	江戸時代後期～幕末	シジミ類1点	-	-	-	-	
		50101	江戸時代後期～幕末	シジミ類2点、ハマグリ6点、ツメボイ科1点、アライグマ1点、イヌ1点	-	-	-	-	
		土001	江戸時代後期～幕末	アライグマ1点	-	-	-	-	
		遺構外	江戸時代後期～幕末	アライグマ1点、ツメボイ科1点、シジミ類1点、アライグマ1点、ハマグリ2点、アライグマ1点	-	-	-	-	
		502	幕末～明治	アライグマ1点、ハマグリ1点、シジミ類1点	-	-	-	-	
		504	江戸前期～中期	アライグマ1点、ハマグリ1点	-	-	-	-	
		505	幕末～明治	アライグマ1点、ハマグリ1点、シジミ類1点	マガロ蟹1点	-	-	-	
		507(土層一帯(土層))	幕末～明治	アライグマ1点	-	-	-	-	
		508(堀)	幕末～明治	アライグマ1点、ハマグリ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
遺	野人堀	505	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	ニワトリ1点	-	甲府市教育委員会(2016)
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	ニワトリ1点	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	
		506	江戸中期	アライグマ1点、ツメボイ科1点	-	-	-	-	



図版1

ニホンジカ 1.角座(左右不明)(落角) 2.上腕骨遠位端(右)(切断) 3.中手骨近位端~部(右) 4.中手骨遠位端(左右不明)(切断) 5.大腿骨遠位部(左)  
 イノシシ 6.上顎骨[M3](右) 7.上腕骨近位端(左) 8.上腕骨遠位端(左) イヌ 9.脛骨近位端~部(左) 10.脛骨遠位部~端(左)  
 イルカ類 11.椎体 ウマ 12.頸椎 イノシシ属? 13.上腕骨遠位部?(右?)

## 第2節 甲府城下町遺跡（武田1丁目44-1地点）から出土した大型植物遺体

バンダリ スダルジャン（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

山梨県甲府市に所在する甲府城下町遺跡の武田1丁目44-1地点において、溝などの堆積物より出土した大型植物遺体の同定を行い、当時利用された植物や遺跡周辺の古植生について検討した。

### 2. 試料と方法

試料は、昭和測量株式会社によって採取された堆積物5試料と水洗選別後に抽出済みの3試料の、計8試料である。試料の内訳は、古墳時代～平安時代の3号不明遺構（SX3）から1試料、中世末～近世初頭の2号溝（SD2）から1試料と、3号溝（SD3）から3試料、4号溝（SD4）から1試料、9号溝（SD9）から1試料、1号不明遺構（SX1）から1試料である。

3号溝（SD3）のNo.2、No.3と、1号不明遺構（SX1）のNo.4の水洗から種実の抽出までの作業は、昭和測量株式会社によって行われた。水洗には最小0.5mm目の篩が用いられた。水洗量は不明である。2号溝（SD2）のNo.6と3号溝（SD3）のNo.5、4号溝（SD4）のNo.7、9号溝（SD9）のNo.8、3号不明遺構（SX3）No.9については、パレオ・ラボにて、300ccまたは500ccを最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。

大型植物遺体の抽出および同定、計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。イネの籾殻は、小穂軸が残っている場合に1個体とした。小穂軸以外の籾殻、昆虫遺体、動物遺体の破片は、おおよその数を記号（+）で示した。同定された試料は、甲府市教育委員会に保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のクリ炭化果実のみ1分類群、草本植物ではヘラオモダカ果実とスゲ属果実、ホタルイ属果実、イネ籾殻・炭化籾殻・炭化種子（穎果）、オオムギ炭化種子（穎果）、タガラシ果実、ヒシ属果実、マメ科炭化種子、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実、メロン仲間種子、スミレ属種子、ワタ炭化種子、サナエタデーオオイヌタデ果実、アカザ属種子、シソ属果実、タカサブロウ果実の16分類群の、計17分類群が見いだされた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明A炭化種実、残存状態が悪く微細な破片であるため識別点を欠く同定不能な種実の一群を同定不能炭化種実とした。また、大型植物遺体以外に、昆虫遺体と動物遺体が含まれていたが、同定の対象外とした（表1）。

表1 甲府城下町遺跡（武田1丁目44-1地点）から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

分類群	試料No.									
	No. 6	No. 5	No. 3	No. 2	No. 7	No. 8	No. 4	No. 9		
	遺物No.		No. 84	No. 66	No. 52			No. 19		
	遺構名		2号溝	3号溝	4号溝	9号溝	1号不明遺構	3号不明遺構		
	SD2		SD3	SD4	SD9	SX1	SX3			
	時期		中世末～近世初頭						古墳～平安	
	水洗量 (cc)		300	500	-	300	300	-	300	
フリ	炭化果実									
ヘラオモダカ	果実									
スゲ属	果実									
ホタルイ属	果実									
イネ	籾殻									
	炭化籾殻									
	5	19 (+)			1	1	1 (+)			
		(4)								
		(4)	1							
オオムギ	炭化種子（穎果）									
タガラシ	炭化種子（穎果）									
ヒシ属	果実									
マメ科	炭化種子									
オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属	果実									
メロン仲間	種子									
スミレ属	種子									
ワタ	炭化種子									
サナエタデーオオイヌタデ	果実									
アカザ属	種子									
シソ属	果実									
タカサブロウ	果実									
不明A	炭化種実									
同定不能	(19)	(19)		(1)	(6)	(10)				
不明	動物遺体									
不明	昆虫遺体									

\*:1-9, \*\*:10-19

以下に、大型植物遺体の産出傾向を時期ごとに、試料別に記載する。

[古墳時代～平安時代]

3号不明遺構(SX3) No.9: スミレ属がわずかに得られた。

[中世末～近世初頭]

2号溝(SD2) No.6: イネとアカザ属がわずかに得られた。

3号溝(SD3) No.5: イネとワタが少量、クリとオオムギ、マメ科がわずかに得られた。

3号溝(SD3) No.3: イネが1点得られた。

3号溝(SD3) No.2: 同定可能な炭化種実は何れも得られなかった。

4号溝(SD4) No.7: ヘラオモダカとホタルイ属、イネがわずかに得られた。

9号溝(SD9) No.8: アカザ属がやや多く、イネとサナエタデーオオイヌタデ、タカサブロウが少量、スゲ属とホタルイ属、タガラシ、ヒシ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、メロン仲間、スミレ属、シソ属がわずかに得られた。

1号不明遺構(SX1) No.4: オオムギが1点得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APG IIIリストの順とした。(※図版は48頁に掲載)

(1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実 プナ科

完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつくが、残存していない。残存高 3.9mm、残存幅 2.9mm。

(2) ヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* A.Braun et C.D.Bouché 果実 オモダカ科

暗黄褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。周囲が肥厚し、中央では薄く種子が透けて見える。長さ 2.1mm、幅 1.4mm。

(3) スゲ属 *Carex* spp. 果実 カヤツリグサ科

暗赤褐色で、上面観は三稜形、側面観は倒卵形。頂部に突起があり、表面には微細な網目状隆線がある。長さ 1.4mm、幅 1.0mm。

(4) ホタルイ属 *Schoenoplectus* spp. 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は短倒卵形。頂部が尖り、基部に向かって狭まり、着点がある。壁は硬く、光沢がある。波打った溝が横方向に走る。長さ 2.2mm、幅 1.8mm。

(5) イネ *Oryza sativa* L. 籾殻・炭化籾殻・炭化種子(穎果) イネ科

籾殻は黄褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。籾殻の大きさは、残存長 2.3mm、残存幅 1.1mm。炭化籾殻は、残存長 1.0mm、残存幅 0.9mm。種子(穎果)は、上面観が両凸レンズ形、側面観が楕円形。一端に胚が残る。両面に縦方向の2本の浅い溝がある。炭化種子は、長さ 5.0mm、幅 3.1mm。

(6) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

完形ならば側面観は長楕円形。腹面中央部には縦に走る1本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚があるが、残存していない。断面は楕円形。残存長 3.6mm、幅 2.5mm、厚さ 1.9mm。

(7) ヒシ属 *Trapa* sp. 果実 ミソハギ科

赤褐色。完形ならば不整三角形で、先端が尖った角が4方向に伸びる。残存長 1.0mm、残存幅 3.4mm。

(8) マメ科 *Fabaceae* sp. 炭化種子 マメ科

完形ならば球形に近い広楕円体。表面は平滑で、にぶい光沢がある。横半分くらいの臍が残っているため、ササゲ属アズキ亜属以外のダイズ属やエンドウ属の可能性はあるが、一部のみの残存では同定できないため、マメ科とした。残存長 2.2mm、残存幅 3.1mm。

(9) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

黄褐色で、完形ならば上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭でやや厚みがある。残存長 1.7mm、

残存幅 1.4mm。

(10) スミレ属 *Viola* spp. 種子 スミレ科

赤褐色で、上面観は円形、側面観は卵形。表面には、薄く密な縦方向の筋がある。下端中央にへそがある。長さ 1.8mm、幅 1.3mm。

(11) ワタ *Gossypium arboreum* L. var. *obtusifolium* (Roxb.) Roberty 炭化種子 アオイ科

倒卵形体。端部が又状に分岐するが、残存していない。基部は中央からややずれた位置につく。先端と基部を結ぶ浅い稜線が縦方向に 1 周する。表面はざらつく。長さ 5.0mm、幅 4.1mm、厚さ 4.1mm。

(12) サナエタデーオオイヌタデ *Persicaria lapathifolia* (L.) Delarbre var. *incana*-*P.lapathifolia* (L.) Delarbre var. *lapathifolia* 果実 タデ科

赤褐色で、上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は広卵形で先端が尖る。表面は平滑で、やや光沢がある。長さ 2.3mm、幅 1.7mm。

(13) アカザ属 *Chenopodium* spp. 種子 ヒユ科

黒色で、上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は硬く、強い光沢がある。着点の一端がやや突出し、中心部方向に向かって浅い溝がある。長さ 1.0mm、幅 1.1mm。

(14) シソ属 *Perilla* spp. 果実 シソ科

黄褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。長さ 1.4mm、幅 1.1mm。

(15) タカサブロウ *Eclipta thermalis* Bunge 果実 キク科

暗黄褐色で、頂部はやや切形になり、冠毛着点の隆起がある。腹面はやや扁平で、瘤状突起がある。両側はコルク質で、翼状になる。長さ 2.2mm、幅 1.2mm。

(16) 不明 A Unknown A 炭化種実

変形しているため、全体形は不明である。表面は平滑。残存長 5.6mm、残存幅 4.6mm。

#### 4. 考察

以下、産出した大型植物遺体について、時期ごとに考察する。

古墳時代～平安時代の 3 号不明遺構 (SX3) からは、スミレ属が得られた。

中世末～近世初頭の 9 号溝 (SD9) からは、栽培植物で水田作物のイネ、畑作物のメロン仲間が得られており、周辺の水田や畑地から流れ込んだ可能性や、居住域において利用された後に、食べられない部位や残滓が廃棄された可能性が考えられる。イネは、籾殻や炭化籾殻が産出しており、籾摺り後に籾殻が燃やされ、廃棄された可能性がある。野生植物では、湿地性植物のスゲ属やホタルイ属、タガラシ、やや湿った道端に生育するタカサブロウ、浮葉植物のヒシ属が産出しており、9 号溝周辺の湿潤な場所に生育していた可能性がある。ほかにも、オランダイチゴ属～ヘビイチゴ属やスミレ属、サナエタデーオオイヌタデ、アカザ属、シソ属などが得られており、周辺の乾燥した場所に生育していた可能性がある。

4 号溝 (SD4) からは、栽培植物のイネと、野生動物で湿地性のヘラオモダカとホタルイ属が産出しており、溝周辺に湿潤な場所が存在した可能性がある。3 号溝 (SD3) からは、栽培植物で水田作物のイネ、畑作物のオオムギとワタ、野生植物で食用として利用可能なクリとマメ科が得られた。いずれも炭化しており、近辺で利用されたイネやオオムギ、ワタなどの栽培植物の残滓が、何らかの理由で燃えた後に、3 号溝に堆積したと考えられる。ワタは繊維製品を作る際に利用されるが、利用されない種子は廃棄された可能性がある。クリは炭化果実の破片が得られており、食用となる子葉を取り出した後に、不要な果実が燃やされ、堆積した可能性がある。2 号溝 (SD2) からは、栽培植物のイネと、野生動物のアカザ属が得られた。また、1 号不明遺構 (SX1) からは、栽培植物のオオムギが得られた。

#### 引用文献

米倉浩司・梶田 忠 (2003) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

### 第3節 甲府城下町遺跡（武田1丁目44-1）出土の溶融物付着土器の元素マッピング分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

甲府城下町遺跡（武田1丁目44-1）より出土した溶融物付着土器の元素マッピング分析を行い、付着溶融物の材質について検討した。

#### 2. 試料と方法

分析対象は、溶融物の付着するかわらけ1点である（表1）。時期は、中世末～近世初頭とみられている。溶融物が付着するかわらけ内面について、元素マッピング分析および特徴的な箇所でのポイント分析を行った。

表1 分析対象遺物

分析No.	遺物番号	出土遺構	時期	器種	残存部位	備考
1	16	4号溝(SD4)	中世末～近世初頭	かわらけ	口縁部	内面に溶融物が付着

分析には、エネルギー分散型蛍光X線分析装置の一種である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-9000を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム（Rh）ターゲット、キャピラリ径が100 $\mu$ mまたは15 $\mu$ m（いずれもボリキャピラリ）、X線検出器はSDD検出器（透過X線はNaI(Tl)シンチレータ）で、検出可能元素は炭素（C）～アメリカシウム（Am）である。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により、元素マッピング分析が可能となる。元素マッピング分析を行った後、得られたマッピング図を基に特徴的な箇所を選び、ポイント分析を行った。元素マッピング分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流343 $\mu$ A（自動設定）、キャピラリ径100 $\mu$ m、ピクセルタイム200msを1回走査で測定後、ピーク分離を行った。ポイント分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流自動設定、キャピラリ径100 $\mu$ m、測定時間500sに設定し、定量分析は、ノンスタンダードFP法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。得られた値は、合計が100%になるようノーマライズされている。

蛍光X線分析は表面分析であり、均一とは限らない遺物の正確な組成比を必ずしも示しているとはいえないが、おおよその化学組成、含まれている微量元素を知る上では非常に有効な手法である。

#### 3. 結果

かわらけ内面の元素マッピング分析により得られた透過X線像、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）、銅（Cu）、銀（Ag）、スズ（Sn）、ヨウ素（I）、金（Au）、鉛（Pb）のマッピング図を図版1に、各マッピング図に示したa～fの各ポイントの半定量分析結果を表2に示す。ポイント分析で検出された金属元素は、ニッケル（Ni）、銅（Cu）、亜鉛（Zn）、ヒ素（As）、銀（Ag）、スズ（Sn）、アンチモン（Sb）、金（Au）、鉛（Pb）、ビスマス（Bi）である。（※図版1は49頁に掲載）

表2 元素マッピング図中ポイントの半定量分析結果（mass%）

分析No.	Si	Ca	Zn	As	Ag	Sn	Sb	Au	Pb	Bi	Ni	Fe	Al	Si	P	S	K	Cl	Ti	Mn	Br	I
a	—	78.23	—	0.25	1.30	0.49	—	1.60	0.00	0.27	—	0.32	1.14	6.60	0.03	0.20	—	—	0.06	0.01	0.59	8.90
b	0.05	35.10	—	0.96	0.11	2.53	0.56	0.37	4.36	0.16	—	0.16	8.19	30.66	2.64	0.07	0.47	4.00	0.43	0.04	10.05	—
c	0.02	11.32	—	0.91	0.05	26.91	0.32	0.15	2.09	0.05	—	—	4.33	18.00	2.61	0.04	—	6.21	0.34	0.06	27.87	—
d	0.23	10.10	0.03	0.02	—	2.00	0.99	—	23.98	0.30	—	0.77	10.59	27.31	3.15	0.10	0.74	9.76	1.25	0.13	9.55	—
e	0.03	17.22	—	—	0.39	0.25	0.34	8.50	2.20	—	—	1.23	11.90	36.31	1.23	0.10	2.88	8.75	0.68	0.07	7.83	—
f	0.02	5.11	—	—	0.21	0.12	—	0.23	0.63	—	2.12	1.48	15.06	38.38	1.14	0.16	3.08	6.30	1.20	0.07	19.99	—

#### 4. 考察

元素マッピング分析では、銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）の輝度の高い箇所の分布がみられた。ポイント分析においても、銅（Cu）の含有量が多い箇所（ポイントa、b）、スズ（Sn）の含有量が多い箇所（ポイントc）、鉛（Pb）の含有量が多い箇所（ポイントd）が確認された。以上より、青銅の類の銅合金の溶解に

利用されたと考えられる。

また、元素マッピング分析では金 (Au) や銀 (Ag) の輝度が高い箇所が点在しており、ポイント分析においても金 (Au) がやや多く含まれる箇所が確認された (ポイント e, f)。ただし、該当箇所を実体顕微鏡で観察したが、金粒などは特に確認できなかった。ポイント e, f とも、銅 (Cu) を多く伴っているため、赤銅 (銅と金の合金) の類の溶解にも利用されていた可能性が考えられる。一方、亜鉛 (Zn) はほとんど検出されず、真鍮の溶解に利用された可能性は低い。

ほかには、微量のニッケル (Ni)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) が検出された。なお、ポイント a 周辺は、マッピング図においてヨウ素 (I) の分布がみられた (図版 1)。ポイント分析においても、高濃度の銅 (Cu) とともにヨウ素 (I) が多く検出されており (表 2 の a)、ヨウ化銅 (CuI) の形で存在していると推定されるが、ヨウ素 (I) の由来は不明である。

遺物から検出された主な金属元素と推定される金属素材を表 3 に示す。

表3 分析結果

分析 No.	遺物番号	器種	主な検出元素	推定される金属素材
1	16	溶融物付着 かわらけ	Cu, Sn, Pb, Au	青銅、赤銅

#### 参考文献

- 香取正彦・井尾敏雄・井伏圭介 (1986) 金工の伝統技法, 230p, 理工学社。  
村上 隆 (2003) 金工技術, 日本の美術, 443, 98p, 至文堂。  
長野 裕・井尾建二 (1998) 金工の着色技法, 157p, 理工学社。  
中井 泉編 (2005) 蛍光 X 線分析の実際, 242p, 朝倉書店。

## 第5章 総括

### 武田1丁目44-1地点の調査成果

武田1丁目44-1地点は近世の甲府城下町では上府中の細工町二丁目という町人地に該当する。職人の町である。またこの地点は、甲府城下町とそれ以前の中世武田城下町が重なる範囲と考えられている。

調査では土坑13基、溝8条、石列3条、小穴8基、杭4本、不明遺構3基を検出した。主な時代は中世末から近世初頭と、近世から近代に分けられる。

中世末から近世初頭の主な遺構は、調査区内を南北に通る溝のSD2、SD4、SD7、SD5、東西に通る溝のSD8、SD9である。溝からは大窯期の灰釉陶器やカワラケ、染付貿易陶磁器、渡来銭などが出土している。現在の地割が近世の甲府城下町からの区画を比較的踏襲していることが多いことから考えると、広いところでは幅2m深いところでは深さ50～90cmにもなるこれらの溝が、近世城下町の町人地の一区画を分断するように縦横に延びていることになる。出土遺物や遺構の配置からこれらの溝は近世甲府城下町以前の中世武田城下町に属する遺構とみられる。

SD4では底面近くの下層の埋土に砂層があり、溝の開削から一定期間は水が流れるような状況があったと考えられる。最終的には溝が埋まった状況から石をはめ込み溝の流れに沿って1列1段の石列を作っている。SD2では埋土の堆積状況から溝が埋まった時期が3回に分かれると考えられ、埋まった後に同様の位置を掘りなおしていると考えられる。そして3回目の石列が作られる時期は次に記載する暗渠SS1と接続し排水を集めていたものとする。このような状況から、これらの溝は中世武田城下町時代の区画溝として開削され、排水機能を持ち、埋まった後も石列により地境を示すものであったと考えられる。

次にSD4より新しい遺構として土坑のSK4、SK5、SK11や石列（暗渠）のSS1などがある。SK4からは陶器の播鉢や大皿、土器のカワラケのほか石製品の茶白やヒデ鉢も出土している。同様の大皿は2個の完形の陶器小杯と共にSK13からも出土している。SK5からは土器のカワラケや鉢が出土している。SK11からは土器の播鉢が出土している。SK4、SK5、SK11の埋土には共通して焼土塊が含まれている。またSS1の暗渠蓋石に混じて出土した志野皿は被熱してやや灰色に変色している。出土遺物から遺構の時期は溝と同様に中世末から近世初頭と考えるが、溝が埋まった後に火災が起きた時期という可能性が考えられる。

次の近世と考えられる遺構は溝SD6のみである。SD6では近世の陶磁器が少量出土している。溝SD6の東西方向に延びる位置は、近世の甲府城下町で考えると北側の細工町からの区画ではなく、東側の元蓮雀町から延びる区画に重なる可能性が考えられる。

最後に近代の主な遺構は土坑のSK1、SK2、SK3などで近代・戦中の陶磁器やガラス瓶などが出土している。遺構埋土の状況からゴミを燃やした、あるいは燃えたゴミを埋めたゴミ穴と考えられる。

調査区の位置は近世甲府城下町では上府中の細工町二丁目という町人地にあたるが、調査の結果は近世の遺構や遺物が主体として出土しなかった。これは調査区が細工町の通りに面した箇所ではなく、通りから30mほど奥まった箇所であるため建物遺構が少ない箇所であった可能性が考えられる。また、調査対象の事業敷地内には鉄筋コンクリート5階建ての商業施設と木造2階建てのアパートが建っていたため、調査区内の広範な範囲では地上上面まで攪乱が生じていた。このことが深く掘り込まれていない遺構を消失させたという可能性も考えられる。調査結果としては主体ではなかったが、遺構外の遺物として「細工町」の隣の「白木町」の名が入った通い徳利も出土している。このことから、近世甲府城下町の細工町二丁目の生活も営まれていたと考えられ、中世武田城下と近世甲府城下とが重なり合う地区であることが確認出来た。

#### 武田1丁目44-1地点出土の動物遺体について

武田1丁目44-1地点の調査では中世末から近世初頭の遺構と考えられる溝SD2、SD4、SD8、SD9から獣骨が出土している。分析の結果、ニホンジカ、イノシシ、イヌ、イルカ類、ウマ、イノシシ属という同定結果が報告された。中世の武田城下町と近世の甲府城下町の両域内での動物資源利用の多様性が空間的に加え、時期的変遷からも示される興味深い結果が指摘された。

#### 武田1丁目44-1地点出土の大型植物遺体について

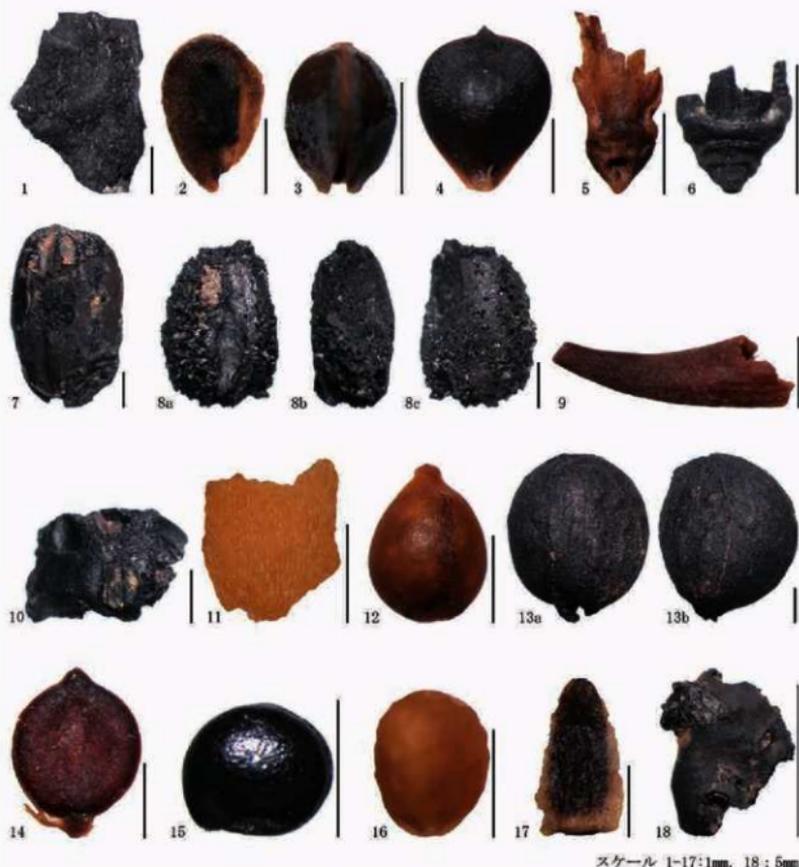
武田1丁目44-1地点の調査では中世末から近世初頭の遺構と考えられる溝SD2・SD3、SD4、SD9、SX1とより古い時期の古墳時代から平安時代の遺構と考えるSX3の埋土を用いて、大型植物遺体の同定分析を行った。分析の結果、17種の大型植物遺体が同定されたが、SX3以外の、中世末から近世初頭の遺構(SD2、SD4、SD9、SX1)からは栽培植物が含まれており、より古い時期の遺構と考えるSX3からは栽培植物が得られなかった。武田城下町成立以前と以後の植物利用変化を示す興味深い指摘と考える。

#### 武田1丁目44-1地点出土の溶融物付着の土器について

武田1丁目44-1地点の調査では中世末から近世初頭の遺構と考えられる溝SD4から出土したカワラケに付着した溶融物の同定分析を行った。分析の結果、カワラケが青銅の類の銅合金の溶解、または赤銅(銅と金の合金)の類の溶解に利用されていた可能性が指摘された。近世甲府城下町域においても溶融物付着土器が中世武田城下町期に属する遺構から出土する遺物であるとされているが、今回の分析でも同様な結果となった。今回、武田1丁目の地点に溶融物付着土器出土地点の分布を新たに印すことで、中世武田城下町における金属加工活動の広がりを見出す一助となると考える。

#### 引用・参考文献

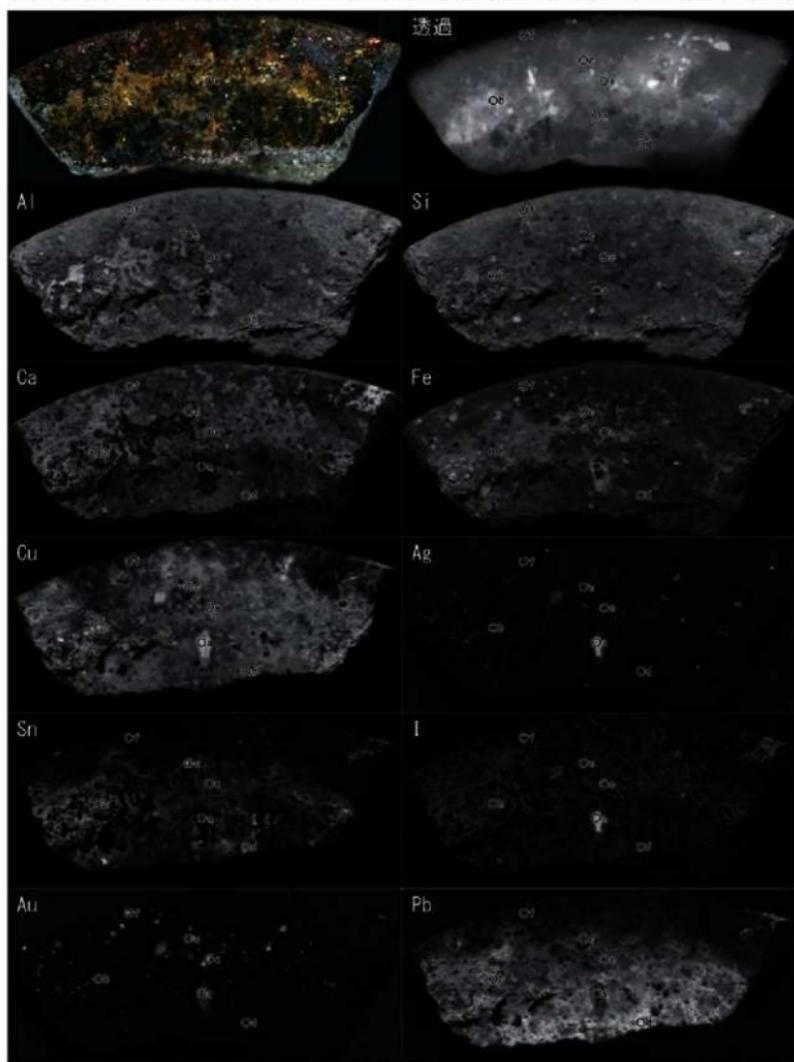
- 山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第215集  
山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第220集  
甲府市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所 2012『甲府城下町遺跡VI』甲府市文化財調査報告57  
甲府市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所 2016『甲府城下町遺跡XVII』甲府市文化財調査報告85



スケール 1-17:1mm, 18:5mm

図版1 甲府城下町遺跡（武田1丁目44-1地点）から出土した大型植物遺体

1. クリ炭化果実（3号溝、No.5）、2. ヘラオモダガ果実（4号溝、No.7）、3. スグ属果実（9号溝、No.8）、4. ホタルイ属果実（9号溝、No.8）、5. イネ籾殻（9号溝、No.8）、6. イネ炭化籾殻（3号溝、No.5）、7. イネ炭化種子（3号溝、No.3）、8. オオムギ炭化種子（3号溝、No.5）、9. ピシ属果実（9号溝、No.8）、10. マメ科炭化種子（3号溝、No.5）、11. メロン仲間種子（9号溝、No.8）、12. スミレ属種子（9号溝、No.8）、13. ワタ炭化種子（3号溝、No.5）、14. サナエタデーオオイヌタデ果実（9号溝、No.8）、15. アカザ属種子（9号溝、No.8）、16. シソ属果実（9号溝、No.8）、17. タカザブロ果実（9号溝、No.8）、18. 不明A炭化種実（9号溝、No.8）



図版1 溶融物付着土器内面の元素マッピング図

透過：透過X線像 Al：アルミニウム Si：ケイ素 Ca：カルシウム Fe：鉄 Cu：銅 Ag：銀 Sn：スズ  
I：ヨウ素 Au：金 Pb：鉛



調査区 石列検出状況 (モザイク写真：上が北)



調査区 発掘状況 (モザイク写真：上が北)



調査区発掘 1A～2E グリッド 北から



調査区発掘 1A～2E グリッド 東から



調査区発掘 3E グリッド 東から



調査区発掘 1Z・2Z グリッド 西から

図版 2



SX3 遺物出土状況 南から



SX3 完掘 東から



SP8 完掘 東から



SX1 東セクション 西から



SD4・SD7 セクション 南から



SD4 石列 西から



SD4 遺物出土状況(骨シカ) 西から



SD4 遺物出土状況(金属製品) 西から



SD4 遺物出土状況 SD7 完掘 北から



SD9 セクション 北から



SD9 完掘 西から



SD2 セクション 北から



SD2 セクション 南から



SD2 石列検出状況 西から



SD2 遺物出土状況 西から



SD2 遺物出土状況 西から



SD2 遺物出土状況 東から



SD2 遺物出土状況 東から



SD2 遺物出土状況 東から



SD2 遺物出土状況 東から



SD2 遺物出土状況 (骨ウマ) 東から



SD2 石列礎出土状況 北から



SK6・SD2 セクション 南から



SK13 遺物出土状況 東から



SK13 完掘 北から



SD5 セクション 南から



SD8・SD4 セクション 東から



SD8 完掘 東から



SD7 完掘 北から



SX2 セクション 北から

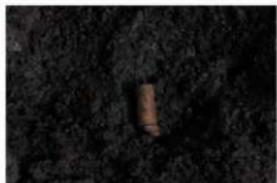
図版 4



SK4 セクション 東から



SK4 遺物出土状況 南から



SK4 遺物出土状況 南から



SK4 遺物出土状況 東から



SK4 完掘 東から



SK4 セクション 南から



SK5 完掘 東から



SK11 セクション 東から



SK11 遺物出土状況 西から



SK11 完掘 北から



SK9 セクション 北から



SS1 セクション 東から



SS1 遺物出土状況 東から



SS1 遺物出土状況 南から



SS1 蓋石・壁石検出土状況 東から



SS1 壁石検出土状況 東から



SD6 セクション 西から



SD6 発掘 東から



SK12 セクション 南から



SK12 発掘 北から



SK1 セクション 東から



SK1 発掘 東から



SK2 セクション 西から



SK2 発掘 南から



SK3 セクション 東から



SK3 発掘 南から



SK7・SP2 セクション 北から



SK7 発掘 南から



SP2 発掘 西から



SK8 セクション 西から

図版 6



SK8 完掘 西から



SD1 セクション 北から



SK10 セクション 北から



SK10 完掘 北から



SP1 セクション 北から



SP1 完掘 北から



SP3 セクション 北から



SP3 完掘 北から



SP4 セクション 西から



SP4 完掘 北から



SP5 セクション 西から



SP5 完掘 東から



SP6 セクション 南から



SP6 完掘 南から



SP7 完掘 南から



SD4



SD9



SD2



SD2



SD2



33



34



35



36



37

SK13



1



2



3

SD5



1



2

SD8



1



2

SD7



1



2

SK4



SK5



SK11



SS1



SD6



SK1



SK2



SK3



SD1



遺構外



## 報告書抄録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき32 (やまなしけんこうふしたけだ1ちょうめ44-1ちてん)
書名	甲府城下町遺跡32 (山梨県甲府市武田1丁目44-1地点)
副書名	集合住宅建設事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	134
編著者	高野高潔・志村憲一・櫻庭陸央・山本満梨奈・植月学・パンダリ スタルシャン・竹原弘展
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448
発行年月日	2023(令和5)年12月25日

ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因		
所取遺跡名	所在地	市町村	道路番号	北緯	東経			
こうふじょうかまちいせき	やまなしけんこうふしたけだ1ちょうめ44-1	19201	253	35°40'20"	138°34'13"	令和4年8月16日 ～10月15日 令和5年5月17日 ～6月13日	265㎡	集合住宅建設事業
甲府城下町遺跡	山梨県甲府市武田1丁目44-1							

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲府城下町遺跡	城下町	中世 近世 近代	土坑・小穴・石列・溝状遺構・不明遺構	磁器・陶器・土器・瓦・土製品・木製品・石製品・金属製品・ガラス製品・動物遺体・種子など	溝状遺構からカワラケや灰釉陶器が出土し15世紀後半から16世紀初頭にさかのぼる可能性がある。

要約	<p>特筆すべき遺構として、中世末から近世初頭の溝状遺構、土坑が検出されている。</p> <p>溝状遺構からは、カワラケや灰釉陶器が出土し15世紀後半から16世紀初頭にさかのぼる可能性がある。カワラケには溶融金属が付着しているものがあり、金属加工の痕跡と考えられる。また骸骨が出土している。いずれも哺乳類でニホンジカ、イノシシ、イヌ、イルカ類、ウマ、イノシシ属などが出土している。</p> <p>土坑からは、播鉢・茶臼・カワラケ・陶器皿などが出土し15世紀後半から16世紀初頭にさかのぼる可能性がある。</p>
----	---

甲府市文化財調査報告134

### 甲府城下町遺跡32

(山梨県甲府市武田1丁目44-1地点)  
—集合住宅建設事業に伴う発掘調査報告書—

2023(令和5)年12月25日 発行

編集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発行 株式会社マリモ・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社

印刷 株式会社内田印刷所